

INFORMATION Circular

THE JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

<http://www.bcasj.or.jp/jsdb>

HP記事随時更新中(サーキュラーより早い)!
求人記事・集会案内記事大募集中!!

■国際発発生物学会の準備状況と細胞生物学会からの呼びかけについて……竹市 雅俊……	1
■14th INTERNATIONAL CONGRESS OF DEVELOPMENTAL BIOLOGY……	3
■DGD編集部より……	5
■第32回大会を終えて……	6
■第32回発発生物学会に参加して……	9
■発生学会印象記—新しい時代の流れを目の当たりにして……藤森 俊彦……	11
■日本発発生物学会運営委員会議事録……	12
■第32回 日本発発生物学会総会議事録……	17
■ホームページ委員会より経過と状況報告……阿形 清和……	20
■第33回高知大会HPついに開設……川村 和夫……	23
■ヨーロッパ発発生物学会参加レポート……若松 義雄……	24
■生物科学学会連合について……八杉 貞雄……	26
■科研費審査システムに関する動物学会の提言について……	26
■日本発発生物学会会則……	27
■お知らせ・研究助成・集会案内……	32
■会員移動……	40
■入会案内・広告掲載のお願い……	48

NO.93

AUGUST 1999

日本発発生物学会

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学理学系研究科生物科学

会 長：〒 606 京都市左京区北白川追分町
-8520 京都大学大学院生命科学研究所
竹市雅俊 (Tel:075-753-4196)
(Fax:075-753-4197)
(e-mail:takeich @ take. biophys. kyoto-u. ac. jp)

DGD編集主幹：〒 739 東広島市鏡山1-3-1
-0046 広島大学理学部遺伝子科学専攻
嶋田 拓 (Tel:0824-24-7446)
(Fax:0824-24-7498)
(e-mail:dgdedit @ ipc. hirosshima-u. ac. jp)

事務局：〒 192 東京都八王子市南大沢1-1
-0397 東京都立大学大学院理学系研究科生物科学専攻
Fax:0426-77-2559 (生物科学事務)
e-mail:jsdb @ bcasj. or. jp
(幹事長) 八杉貞雄 (Tel:0426-77-2572)
(庶務幹事) 福田公子 (Tel:0426-77-2572)
(会計幹事) 西駕秀俊 (Tel:0426-77-2573)

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込5-16-9
-8622 財団法人 学会事務センター
日本発生物学会担当係 (Tel: 03-5814-5810)
e-mail:jsdb @ bcasi. or. jp

日本発生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面またはe-mailでお問い合わせ下さい。なおDGDにつきましては直接、ブラックウェルサイエンス社にお願いいたします (Fax:+61-39349-3016)。

サーキュラーへの投稿募集

日本発生物学会サーキュラーは会員の皆様の情報誌として年3回発刊されます。学会に対する提言、研究雑感、実験手法、学会見聞記、関連学会案内、書評等どのような内容でも結構ですので、是非事務局にお寄せ下さい。

国際発生生物学会の準備状況と 細胞生物学会からの呼びかけについて

会長 竹市雅俊

この文章を書き始めているのは8月上旬、京都では最近とみに増加したクマゼミの騒々しい大合唱を聞きながらです。しかし、最終原稿を事務局に送るころには、ツクツクボウシが鳴き始めているに違いありません。そしてサーキュラーに印刷されて皆様の目に留まるのは、コオロギの音が盛りになるのでしょうか。国際発生生物学会を日本で開催することは引き受けた時点では、まだ4年あると思ったわけですが、早くも後2年弱となってしまう、時の経つ早さが恨めしく思えます。

さて、国際発生生物学会プログラムのアウトラインができたましたので、本サーキュラー上でお知らせします。また、本学会のホームページでも見ていただけます。
http://www.bcasj.or.jp/jsdb/e_index.html 秋から冬にかけて、招待講演者等が具体的に決定される予定です。取り上げたいテーマが山ほどありますが、時間の関係ですべてを採用するわけにいかず残念です。現在のプログラムでも5日間びっしりセッションが詰まっております、ハードな勉強を覚悟していただかねばなりません。また、本学会は、純学問としての発生生物学会だけに関係している会員が多数を占めていると思いますが、発生生物学は今や、クローン動物、幹細胞の利用など、社会に対しても深い関わりを持ち始めており、この流れは今後いっそう強まるでしょう。私達は、必然的にこのような問題に関心を払わざるを得ず、国際会議には、応用分野の方々にも多数出席していただき、議論が盛り上がることを期待しています。

ところで、日本細胞生物学会の廣川信隆会長から連絡があり、細胞生物学会では、発生生物学会との連携を深めていくための議論・提案がなされているということで、本学会からのレスポンスも求められています。細胞生物学と発生生物学は、研究の視点の違いにより、ある種、別のジャンルを形成しており、国際的にも、学会・学術雑誌等は、別々の場合が多いわけです。しかし、どちらの分野の研究も、「細胞」を起点としており、数ある生物学分野の中でも、もっとも近い関係にあります。細胞生物学では、個々の細胞の構造と機能の研究が中心ですが、そこで明らかにされる種々のメカニズムが、「発生」という、より高次の現象にどう関わるか、興味もたれるのは必然的ななりゆきでしょう。

発生生物学は、一般に、多細胞システムを問題としており、その次元でのルールの発見

に主眼が注がれることが多いわけです。また、それがこの分野に独特な学問的雰囲気を作っているように思えます。私達は、このような発生生物学分野の"taste"を、おおいに楽しんでいるわけですが、一方、多細胞システムを働かせているのは個々の細胞であり、その中で起きている巧妙な分子反応系を知らねばなりません。両者がドッキングしてこそ、「わかった」という領域により接近できるわけです。生物現象には階層性があり、それぞれの階層の間には、我々の思考能力では容易に埋めることができない（あるいは敢えて埋める必要のない）ギャップが存在するので、異分野間の交流が、かならずしも生産的であるとは限りませんが、細胞生物学会と発生生物学の関係は、そんなに縁遠いものではなく、発生現象は、所詮、細胞行動の一様式に過ぎないというのが、私の見解です。

発生生物学の研究を他分野の人がみたときどう感じるか？ ある典型的な反応として、重要問題に違いないけど複雑でよくわからないとか、我々が非常に面白いと思っている研究を、そうは感じてもらえないとか、そういうことが、時々あります。こういう反応に接する時、私達の研究をどう展開すれば関心を抱いてもらえるのか、思いに耽ることになります。他分野からの不満の一つは、発生研究の多くについて、細胞の中で起きている分子反応系に関する取り組みが、しばしば表層的でありすぎる、ということではないかと感じています。多細胞系の問題の理解をさらに深めるためには、その系を精密に分解して、個々の細胞で起きている事象の深部に迫ることが大切であるというのが、私が常々思うことです。そういう感覚でいますから、廣川先生の呼びかけには、ポジティブな姿勢でいます。

現実には、発生生物学会と細胞生物学会は、気風・学風がかなり異なっており、単純な融合のような方式は難しいと思われます。また、個々の学会の個性を生かすことは大切で、大きなものに成長すれば、失われるものも多々あることでしょう。そういう問題を十分考慮したうえで、会員の皆様には、廣川細胞生物学会会長からの呼びかけについて、一度、考えてみていただけませんか。たとえば、2002年の大会を日程を接して開催し、合同のシンポジウムを両大会の間に置いて、共有しようという案があります。このような案、あるいはその他の方策について、運営委員会でじっくり議論・検討して、細胞生物学会に対応したい考えです。

以上の件、会員の皆様には何かご意見があれば、いつでもお知らせ下さい。よろしく願います。

14th INTERNATIONAL CONGRESS OF DEVELOPMENTAL BIOLOGY

July 8-12, 2001, Kyoto

jointly sponsored by
the International Society of Developmental Biologists and
the Japanese Society of Developmental Biologists

The 14th International Congress of Developmental Biology will be held at Kyoto International Conference Hall in historic Kyoto, Japan from July 8-12, 2001. The congress will include invited plenary lectures, scientific sessions (Symposia and Workshops) and poster presentations on topics of interest to developmental biologists. Symposia and Workshops include:

Symposia:

- Evolution of the body plan
- Embryo early patterning
- Organizing activity in embryogenesis
- Signaling in organogenesis
- Neural patterning
- Wiring the neural network
- Development of behavior
- Functional genomics in developmental biology
- Cell architecture
- Shaping and regenerating organs
- Creation of cell heterogeneity
- Breaking the body symmetry
- Differentiation of sexes
- Germ cells and gametogenesis
- Patterning and transcription factors
- Problems of aging

Workshops: Frontiers of bioimaging
 Emerging genetic technology in developmental biology
 Pattern generation in development: Theory and practice
 Body organization in plants
 Development of appendages
 Generation of metamerism
 Cell and tissue engineering
 Molecular medicine and development
 Development under environmental effects
 Historical synthesis of developmental biology

Organizing Committee: Masatoshi Takeichi (Chairperson), Masukichi Okada, Makoto Asashima,
Noriyuki Satoh, Hisato Kondoh, Yoshitaka Nagahama,

The second (final) announcement which includes registration forms and instruction for abstracts will be available by the middle of 2000.

For further information, please contact:

Secretariat of 14th International Congress of Developmental Biology

c/o Congress Corporation

Kinki Invention Center

14 Yoshida Kawahara-cho, Sakyo-ku

Kyoto 606-8305, Japan

Phone: +81-75-752-0888

Fax: +81-75-762-2304

e-mail: isdb@congre.co.jp

Website: http://www.bcasj.or.jp/jsdb/e_index.html

DGD編集部より

DGD編集主幹 嶋田 拓

編集主幹をお引き受けして2年半がたちました。1998年度impact factorは1.369で前年よりやや低めですが、横這いというところです。DGDをオンラインで読むことができるようになりました。会員は2000円プラスで雑誌の他にオンライン購読をすることができます。投稿数の不足は相変わらずです。発生学関係のジャーナルの競争はますます熾烈になってきていますが、分化以外の発生学分野も積極的に扱う数少ないジャーナルとして本誌は国際的にも一定の評価を得ています。会員諸賢におかれても、国内外で非会員の方に投稿を薦めていただきたいと思います。お気づきになった向きも多いと思いますが、この2年ほどは総説をあまり掲載できませんでした。大勢の方に総説の執筆をお引き受けいただいているのですが、やはりご多忙のためか原稿をなかなかいただけないのが現状です。総説は引用されることが多く、citation indexを増やすことができます。若い研究者がリーダーと共同執筆することによって総説を試みることはよいトレーニングになると思いますので編集部としても積極的に取り上げていきたいと考えています。

3年にわたって編集してまいりましたが、私は今年末で主幹を退き、来年1月からは東京大学の浅島先生に主幹を引きついでいただくことが決まりました。したがって、明年1月1日以降の投稿は、下記にお願いします。

〒153-8902東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科生命系

DGD編集主幹

浅島 誠 教授

就任したときはあれもこれもと私なりの抱負を持っておりましたが、大したこともできず申し訳ない限りです。新しい編集体制のもとにDGDがユニークな発生学誌として発展していくことを願っています。皆様のご協力をお願いいたします。

第32回大会を終えて

大阪市大・理学部・生物 団 まりな

日本発生物学会第32回大会は、さまざまな意味で新しい試みに満ちたものになった。運営委員会でノミネートされた開催地「大阪」は、準備委員会の人員確保のため「ノ京都・関西」に拡大され、西から姫路工大（阿形清和：プログラム＋ホームページ）、甲南大（西方敬人：会場）、阪大（近藤寿人：プログラム）、大阪市大（団まりな：総括）、JT生命誌研究館（青山裕彦：会計、加藤和人：懇親会）の5施設、6名でチームを組むことになった。このため、要所々々での直接会合以外は、多くの事項がメール会議で決められることになった。メール会議は時間の制約も少なく、お金もかからず、便利であったが、どのメンバーからも意見が出ないときのシンとした瞬間は、実際の会議での同様の場面に比べて、議長にかかるストレスははるかに大きいように感じた。

準備委員会で最初に決めたことは、委員の雑用をなるべく減らすために、事務を業者に委託することであった。数社の見積もりを得て、最終的には、本部の事務を委託している「学会事務センター」の大阪支部である「学会センター関西」への委託が決まった。ちなみに、「学会センター関西」への委託費は、大会準備費＋発表要旨集制作費＋大会当日運営費＋事務諸経費の10%であり、今回実際に支払った金額は50万円弱であった。当初は我々の不慣れから具体的な委託行為がスムーズに行きにくかったが、要領を得るにつれて、さまざまな外部との折衝、細かい会計管理、講演要旨の受付、編集後の要旨集の作成、ポスターの印刷と配布などのルーティンの仕事の他、今回の大会のもう1つの大きな試みであるホームページ（HP）の立ち上げに対する積極的な協力など、想像を絶するサポートを得ることが出来た。50万円という金額は、今振り返ってみても「安すぎるのでは？」と感ぜずにはいられない。これからの大会開催校には、大いに委託をお奨めしたい。

今大会の第3の試みは、HPによる講演要旨の申し込みの試行である。すでに多くの会員がご存じのように、この試みは2001年の国際発生物学会に向けての準備の一環であり、姫路工大の阿形清和委員（と、その陰の実力者、榛沢美保 {ハルサワミホ} 夫人）を中心に作業が進められた。本年度は、演題申し込みの形式は例年通りの書面とし、なるべく多くの人に、これと並行してHPにも申し込んでいただく、という方法をとった。その結果、一般演題362題のうち約半数の188題がHPへも投稿され、来年以降へ明るい見通しを持つことができた。以上の詳細については別途報告がなされるので、ここではこれ以上詳しくは述べない。

今大会の初日に行われた公開シンポジウムも、1つの大きな試みであり、準備委員会としては、HPの立ち上げに劣らぬエネルギーを費やした。なるべく多くの会員の興味をカ

バーし、国際的にもup to dateな内容とレベルを目指し、海外から増井禎夫（トロント大学）山田俊哉（クイーンズ大学）、Olivier Pourquie（マルセイユ発生生物学研究所）、Simon Conway Morris（ケンブリッジ大学）の各氏を招聘し、国内からは神戸大学の内匠透、会員の近藤滋（徳島大学）、林茂生（国立遺伝学研究所）の各氏の出席を仰いで、ホットな話題に触れることができた。なお、Olivier Pourquie氏については水野丈夫・八杉真雄両先生のご尽力により日仏会館学者交換事業による招聘を受けることができ、山田俊哉氏については、近藤寿人委員に招聘を願った。記してここに謝意を表したい。記名用紙の集計で見た参加者は347名、その内訳は会員212名、非会員135名であった。当日の印象からすると、おそらく会員の半数から1/3が記名用紙の存在に気付かなかった可能性が考えられる。しかし、非会員の参加はおそらくこの数字に近いものだったのではないだろうか。この数字は、このシンポジウムの専門性の高さを考えると、このままでも当初の予想をはるかに越える高いものである。発生生物学に対する一般的な関心の高さを示していると云えよう。このシンポジウムのための資金は、主として西方敬人委員の努力により、「(財)ひょうご科学技術協会」の助成金を2種目（研究集会開催助成金および海外研究者招聘助成金）獲得することでその約2/3を、さらに、甲南学園の創立80周年記念事業と共催することで、残りの1/3をカバーすることが出来た。また、JT生命誌研究館の工藤光子さんの献身により、すっきりとした、含蓄深いポスターも創ることができた。このデザインは、講演要旨集の表紙にも使わせていただいた。

今大会の会場は、初日の公開シンポジウムは東灘区民センター・うはらホール、2、3日目は甲南大学1、3号館であったが、どちらも真新しく、ハイテク設備のととのった素晴らしい会場であった。特に甲南大会会場では震災後に建て換わった新しくたっぷりしたスペースを縦横につかい、約700人の参加者（登録参加人数は675名）+関係者とともに、これまでにない贅沢な学問空間を創り出すことができた。その1つは、254題のポスターを10題づつの小会場13室と32題づつの中会場3室に分けて、2日間にわたって展示し続けられたことである。酸素が十分にとれ、騒音と時間制限の気にならない環境でのface to faceのディスカッションは、多くの意義ある交流を生み、幾多の創意につながったものと確信する。第2の贅沢は、3つの口演会場とロビーをネットでつなぎ、どの会場からも他の会場の進行状況が分かり、かつ、ロビーのディスプレイからもそれぞれの会場の口演を聞くことができるようにしたことである。このため、他会場で聞きたい口演が迫っていても、安心して目前の口演に集中することができ、かつ、満員で会場に入れな場合やゆったりした気分で口演を聞きたい場合には、ロビーでコーヒーを飲みながら聞くこともできた。しかも、このネットワークのためのハードウェアは、全て甲南大学の設備として備えられているものであり、これを借用することで実現できた。このネットワー

クの作成と運営には、主として阿形、西方、加藤和人各準備委員および学会センター関西の目黒靖氏、そして西方研、阿形研の大学院生たちが当たった。とかく宝の持ち腐れになるこうしたハイテク機器を生かすことができたのは、これらの若い（中若？）エネルギーの献身によるところ大である。

2日間という時間的な制約から、108題の口演は、運営委員会の意に反して、3つの会場で行わざるを得なかった。全ての参加者が、聞きたい口演をなるべく多く聞けるように、口演は2会場以上に分散しないようにする、という本学会大会の伝統の精神に反しないために、3つの会場の進行をビデオに撮影し、見落とした口演を、休憩時間やポスター発表の時間帯に別室で聞くことができるようにした。こうした措置がとれたのも、十分なスペースがあればこそのことである。

口演に関する工夫の3点目は、スライドを廃止し、全てOHPに限定したことである。こうすることによって会場係の人数を大幅に削減し、経費の節約と手続きの煩雑を避けることができた。準備委員会の一抔の不安をよそに、幸いにして何の混乱もなく、全ての口演者の協力を得ることができた。

今大会では、また、初日に公開シンポジウムを行ったために一般演題のための時間が圧迫され、これを保障するために総会と懇親会を、公開シンポジウムに続けて初日に行うという、変則的なプログラム構成をとることになったが、この点でも予想された混乱は起こらず、参加者諸氏のご協力に助けられた。うはらホールから懇親会場である甲南大学平尾会館までの徒歩移動も、頭を切り替えてくれる良い運動であった。平尾会館の高い天井と斬新なデザインの空間は、シンポジストを交えた約290名の参加者をゆったりと包み込み、会費の安さや参加人数の多さを感じさせない、質の高い会合の雰囲気演出してくれた。

以上の各演題の他にワークショップ4題を加えて、5月末の青空の下、大震災の壊滅から立ち上がった神戸市と甲南大学を舞台に、六甲山を背景として、700人の力を持ちよって描かれた学問的風景は、伝統を吹き飛ばすほどに若さあふれる現在の日本発生物学会の姿を、良く表している。この素晴らしい風景も、学舎と設備を提供して下さっただけでなく、公開シンポジウムと参加者1人1人に対して資金的な援助をいただいた甲南学園と甲南大学の寛大な精神と、この精神を準備委員会に橋渡しして下さった会場係の西方敬人委員の尽力に依るものであることを記して、私の報告としたい。

第32回発生生物学会に参加して

基生研・細胞増殖 栗崎 健

今回はじめて、発生生物学会に参加しました。今までにいくつかの異なる学会に参加した経験から各学会はそれぞれ独特の雰囲気があり、時には敷居が高く感じることもあると認識しておりました。そこで、小心者の私は「発生生物学会の雰囲気が肌に合わなかったらどうしよう？」などと、参加前は余計な心配をしたものでした。しかし実際、学会に参加してみると、全体的にカジュアルな雰囲気のおかげで初対面の方々とも（相手はどう思っていたかは別として）気さくに討論することができ、これが余計な心配であったことがわかりました。おかげで、3日間、学会を満喫することができましたと同時に良い刺激を得て研究室にもどることができました。学会から少し時間も経ち記憶も薄れ気味ですが、それでも頭に残っているような私が受けた刺激と、はじめて参加したものとして感じたことについて、書きたいと思います。

私がこの学会で一番期待していたのは、「現象を記載することから新しいパラダイムの発見につながるような研究」を目にすることでした。そんな観点から、特に2つの研究発表には興奮を覚えました。その一つは初日のシンポジウムのなかであったPourquie博士の「A molecular clock linked to vertebrate segmentation」という口演で、somiteがrostral側から一節づつ分化する際にpre-somitic mesodermにおけるhairy遺伝子の発現がsomiteの分化にあわせてoscillationする話。そしてもう一つは、2日目のワークショップ「How do cells recognize their positions and find their targets?」におけるRamirez-Weber博士の「Cytomeres: cellular processes that project to the principle signaling center in Drosophila imaginal discs」という口演で、ハエの翅原基においてsignaling centerとなるanterior/posteriorの境界に向かって周辺の細胞がcytonemeと呼ばれる線維を伸ばして連絡しているという話です。どちらの話も、「これらの現象の発見から何が予想されるのか？」これを考えただけで、口演の途中からわくわくしてしまいました。どちらの話も記載した現象が「実際の発生に必要なものなのか？」そして「一体どう機能しているのか？」といった問題をこれからの研究の課題として残していますが、私は機能がどうであれ「こんな不思議な現象を生物が持っていること」に、ただただ感心してしまいました。そして、それと同時に「彼らはいかにしてこれらを見つけたのだろうか？」、「どうしたらこういう発見ができるのだろうか？」こんな疑問が生まれました。Pourquie博士の研究は、おそらく、最初は調べるたびに遺伝子の発現パターンが変わってしまう、そんな実験結果からその原因を詳細に調べることで、oscillationという考えにたどり着いたと予想されます。また、Ramirez-Weber博士には、どうやって"cytoneme"なるものを見つけたのか直接尋ねたところ。実は本当に偶然のことだという返事が帰ってきました。彼が言うには、全く別の目的でショウジョウバエの翅原基

を取り出して観察しようとしていたところ、たまたま聞きたいセミナーがあって、観察途中のサンプルをしばらく放置してしまい、それをセミナーから戻ってきて観察したところ、翅原基の一部から線維状の物が伸びているのを見つけたのがはじまりだとのことでした。作り話のような話ですが、一つの結果から新しい概念につながるような現象を見つけだす、その感性には頭が下がりました。例えば同じような場面に遭遇したときに、自分は同じように見つけるとができるのだろうか？自分にはそのような能力があるのだろうか？また、ひょっとしたら、自分が今まで行ってきた実験の中にも何か新しい現象が隠れていたのかも知れないし、これからも実験結果の考察を以て新しい概念を導くような現象を発見できるかも知れない。この2つの演題はそんな不安と期待を同時に与え私を刺激するに十分なものでした。

初参加の私に発生生物学会が特に新鮮に映ったのは、研究対象の豊富さでした。そのおかげで様々な生物で様々な組織を用いた研究の演題を見て回ることができ、「進化という時間軸と発生の関係」や「多方面から発生現象を見ること」を自ずと意識させられました。ただし、残念ながら期待して発表を見たものの、不勉強の私には、いったいどういった生物のどんな組織が研究材料に取り上げられているのかイメージできず、塩基やタンパク質の配列とゲルの写真それに一部の組織の拡大像に呆然としてしまう発表もありました。使われている生物がどのくらいの大きさでどんな形をしていてどういった特性があるのか、そしてその生物のどこに着目しているのか？そんなことが理解できていたら個人的にはもっと深く理解ができた気がしました。日程や会場の問題もあり難しいとは思いますが、「百聞は一見にしかず！」ですから、様々な実験対象の生物がどこかに展示される機会や、それらに直に接することができるコースなどが行われれば良いと思います。今ひとつ不思議に思えたことは、植物の発生の話が極端に少ないことです。発生の教科書にも、発生の専門雑誌でも植物の研究を見かけるのに学会では植物の演題が少ないというのは何か違和感がありました。私自身は植物の発生に対する知識は少ないので、植物の演題がいっぱいあったとしてどこまで理解できるかは疑問ですが、それでも学会で直接植物の発生に関する演題を聞ければ、生物に共通するような発生のメカニズムや、その多様性についての考えが深められるような気がしました。

公開シンポジウムのコンセプトと各スピーカー、そしてなによりもその発表順序は実に気に入りました。企画された方の術中にまんまとはめられてしまったという気はしましたが、それはそれで心地よいものでした。学会会場に使われた真新しい建物とその中の充実した設備が先の大震災と無縁ではないことを考えると少し複雑な気分でしたが、学会会場の素晴らしさにはとても驚きました。それと同時にコンピューターを活用した演題や、他会場の進行状況の表示、そしてスムーズな大会運営、これには準備・運営に携わられた方々の気合いとご苦勞を感じました。最後になりますが、楽しく、そして刺激的な時間を演出した下さられた大会の準備・運営に携わられた方々に心から感謝いたします。

発生学会印象記—新しい時代の流れを目の当たりにして

京都大学・院医 藤 森 俊 彦

本年度の発生生物学会に参加してまず感じたのは、会場もプログラムも非常によくオーガナイズされており、ハイテクを駆使した会の進行は素晴らしいことでした。これには、大会準備委員会の皆様の創意工夫によるものだろうと容易に想像され、楽しい会に参加できた事に感謝します。本大会では、特にポスター発表の充実が進んだと感じられました。とても広々としたスペースに掲示されたポスターを見て回る十分な時間がありましたので、じっくり下見もでき、討論がとてもよく進んだ様に感じました。

さて、本大会での発表を通して、新しい時代の流れを迎え変貌を遂げて行く発生生物学の現状を感じました。その点について私自身の勝手な解釈とともに感想を述べさせていただきます。私が発生生物学を学生として学び始めたころは、分子生物学的手法が本格的に発生生物学に用いられ、実験発生学の広がりを見せ始めていました。胚に遺伝子を導入する手法が様々な種で確立され、積極的に胚に働きかけ、あるいは揺らぎを与えるということに、「遺伝子」のレベルで可能になったのは一時代を象徴する事であったと思います。また、特定の遺伝子の発現を記載し、これまでに知られていた発生現象を「遺伝子」に置き換えて語るということが盛んになされてきた様に感じます。この様な流れの中で、新たに取り入れた遺伝子が、発生現象で極めて重要な働きをしていることがわかった、あるいは従来の方法では引き出す事ができていなかった胚の持つポテンシャルを発見できたという様な輝かしい研究も数多く見受けられています。しかし、その反面では、自分のめざす発生現象を語るという目的からはずれて、遺伝子間あるいは分子同士の相互作用というより細かな現象に終始して、最初の目標は何だったのだろうという疑問を伴う様な仕事も増えてきました。私自身の研究でも非常に初期の発生に着目してその時期におきていることを知ろうとして、特定の遺伝子を導入あるいは、つぶすという方法を用いて来ましたが、残念ながら自然はそんなに甘くなく、思っていた方向へ研究が順調に進んできたとは言えない状況です。まるで、一つの分子につかまって、力不足のあまりにそれに振り回されてしまったという様子です。しばしば自分のめざす所を見失わない様にするにはどうすれば良いかを考えるのですが、そこへ今回の学会でも強く感じられた一つの流れが、何かヒントを与えてくれるかも知れないと思わせました。充実したワークショップが多く見受けられたなかで、『発生生物学とゲノムサイエンスとのつきあい方』は印象深いものでした。特に印象的だったのは、反ゲノム派、あるいは「あまり遺伝子だけに頼るのは好きではない人々」までもが、全遺伝子を知りつくす必要もあると身を持って感じているという事実でした。これまでの方法では、発生現象をとらえる為にその現象での主役を演じると予想される遺伝子をクローニングし、塩基配列を決定しそれから役割を想像し、、、という一連の

仕事のパターンとして定着している一方で、塩基配列をひたすら決める事に疑問を抱く人間も少なからず存在します。そこへ時代の流れとしてゲノムプロジェクトが、莫大な情報をもたらしている現在、発生現象を語るという目的で家内手工業的に進めてきた個々の遺伝子の同定との間にある情報量のギャップをどうとらえるかも考えさせられました。そこで浮かんでくる考え方は、これまでの様に発生の現象の中で個々の遺伝子を見ていく方法に平行して、それぞれの現象を「一連の遺伝子群」の挙動から記載する方法が可能であるということです。発生のそれぞれの過程を、状態の変化する細胞の組み合わせだとすれば、一つ一つの細胞の様子は発現している遺伝子群の組み合わせ、あるいは機能している分子群のセットとしてとらえる事が可能です。そうすると、瞬間瞬間に特定の細胞の置かれている状態を記載する事が可能になってくるはずで、実現可能かどうかはさておきそれを全ての細胞で終えてしまえば遺伝子での発生の記載を完了できることになります。各種の動物において、ゲノムプロジェクトによってほぼ全てのcDNAが同定されるのも遠くない将来に可能であるという話も本大会で聞きました。またDNAチップといった技術も非常に急速に進み、多くの人がそれを上手く利用することも予想されます。これまで形態や少ない数のマーカーに頼っていた判断基準がより広がり、さらに厳密な記載が可能になろうと思います。私自身も、今後このような莫大な情報をどうとらえるかを真剣に考えないといけないと感じました。新たな時代を迎えるにあたって、如何にこのような情報を生かして自分なりの方法で生き残るかを考えた時、もう一度古典的な実験に立ち返り、まだ十分に理解が進んだとは言えない発生の事象をとらえ直す必要があるだろうと思います。その実験の一つのツールとして、ゲノムプロジェクトのもたらき情報は非常に役に立つものにちがいありません。生き物の持つポテンシャルを我々が全て理解できたとは言えない現在、どうやってそのポテンシャルを探るか、あるいはどのような方法で胚にこちらから働きかける事でそれを引き出すことが可能かをじっくり考え、新しい世界を開いていく事が私自身での大きな課題であろうと感じました。

日本発生生物学会運営委員会議事録

日時：1999年5月27日（木）18：00－21：00

場所：甲南大学3号館第3会議室

出席者（敬称略）

会 長：竹市 雅俊

運営委員：阿形 清和、井出 宏之、岡野 栄之、高橋 淑子、中辻 憲夫、仲村
春和、仲村 春和、西田 宏記、藤澤 肇、星 元紀、八杉 貞雄

DGD編集主幹：嶋田 拓

第32、33回大会関係：団 まりな、川村 和夫、青山 裕彦

事務局：西駕 秀俊、福田 公子

議題：

報告事項

1. 会長挨拶（竹市会長）
2. 大会委員長挨拶（団大会準備委員長）
 - ・ 事務を学会事務センター関西に依託したため準備委員会の負担が減った
 - ・ HP投稿をスタートさせた。
 - ・ 1日目は公開シンポジウム、総会、懇親会のみとした。
 - ・ 口演会場を3会場とし、各会場の様子をビデオに収録した。ビデオはその時と後に放映する。
 - ・ ポスターは3日間張りっぱなしにする。
 - ・ 甲南大学には会場費を無料にさせていただきだけでなく、補助および共催（公開シンポジウム）で多大な援助をいただいた。
3. 庶務報告（事務局）

会員数	国内	正会員	1074人
		学生会員	355人
		賛助会員	4人
	海外	正会員	50人

合計 1483人（前年より85人増）

研究助成

日産学術研究助成に関する審査の結果以下の方に助成金が決定した。

京都大学再生医学研究所教授 笹井 芳樹

京都大学・院・理・瀬戸臨海実習所助手 和田 洋

4. DGD編集会議からの報告（嶋田編集主幹）
 - ・ 出版状況は順調だが、投稿論文数を増やしたい。
 - ・ 平均カラーページ数2.24/論文
 - ・ Impact factorも順調に伸びている。
 - ・ ISDB大会のabstractをDGDのsupplementとして出版する。
 - ・ ブラックウェルがDGDをonline化した。会員割引価格20ドル。（印刷された雑誌を

ふくむ。) 電子雑誌のみの場合の価格は検討中。

5. 学術会議報告 (星学術会議委員)

- ・ 学術の動向を参照してほしい。
- ・ 科研費の審査員の管理が文部省から学術会議に移行した。審査員が2倍に増え、研連を通して決定することになった。複合領域、発生生物学細目では第1段階審査員は3→6 (うち発生生物学会推薦1→3)、第2段階審査員は2→4 (同じく隔年1→毎年1)。
- ・ 科研費、国際学術研究がなくなったことに対して復活を要求する。
- ・ ISDB大会・学術会議共催にはならないことになった。

6. HP (準備) 委員会報告 (阿形HP委員長)

- ・ 2001年のISDB大会でのHP投稿に備えるため、JSBDのHPを学会事務センターのサーバーに置き、第32回、第33回大会でHP投稿を試行する。
- ・ 第32回大会では312件中200件がHP投稿だった。文字バケなし。HP投稿でのトラブルシューティングをまとめたい。
- ・ HPの英文化を進めている。必要最小限度。ISDBのFirst circularに間に合うように行う。
- ・ 掲示板を置くことが可能になった。大会へのアイデア等を募集できる。

7. ISDB大会報告 (竹市大会準備委員長)

- ・ First circularはHPで行うがSecond circularはどうするか決定中。
- ・ 学術会議との共催はできなくなった。
- ・ プログラムは出来上がりつつある。

8. 次期大会委員長からの挨拶 (川村次期大会準備委員長)

- ・ 一般演題は高知会館でポスター。
- ・ シンポジウムを5-7演題おこなう。詳細はHPで討論していただく。
- ・ 投稿はHPを主とする。

9. その他

次期幹事長を東北大学の井出先生が引き受けていただくことになった。

審議事項

1. 1998年度決算と1999年度予算について (事務局、青山会計監査委員)
 - ・ 1998年度決算 (別紙1)、会計監査が報告され、承認された。
 - ・ 1999年度予算案 (別紙2) が承認された。
2. 科学研究費審査委員候補が投票のうえ決定した。
3. 会則の付加 (HP委員について)

日本発生生物学会ホームページ委員会規則 (別紙3) が承認された。

4. 総会議案が承認された。

1999年度 予算

一般会計

収入費目	金額 (円)
学会費	12,000,000
賛助会費	200,000
文部省補助金	5,890,000
広告代	200,000
雑収入	200,000
利息	5,000
前年度より繰越	4,571,694
合計	23,066,694

支出費目	金額 (円)
DGD 刊行費	7,300,000
DGD 編集費	2,000,000
DGD カラー編集費	700,000
DGD 保管料	150,000
学会事務センター 業務委託費	2,500,000
発送費	1,500,000
サーキュラー印刷費	1,000,000
要旨集印刷費	1,000,000
大会援助費	500,000
ホームページ開設・維持費	700,000
ホームページ委員会	100,000
運営委員会	400,000
事務局経費	500,000
国際発生物学会へ	150,000
予備費	4,566,694
合計	23,066,694

特別会計

金額 (円)	備考
11,000,000	1998年度会計より

1998年度 決算

一般会計

収入費目	金額 (円)
学会費	12,434,400
賛助会費	330,000
文部省補助金	6,930,000
広告代	520,000
利息	4,069
学協会著作権	
協議会分配金	177,682
出版著作権	
協議会分配金	100,000
大会校寄付	1,304,707
バックナンバー	
売り上げ	10,800
前年度繰越金	5,882,549
合計	27,694,207

支出費目	金額 (円)
DGD 刊行費	6,944,768
DGD 編集費	1,700,000
DGD カラー編集費	356,758
DGD 保管料	18,900
学会事務センター業務委託費	1,990,903
名簿作成費	2,027,660
選挙諸費用	746,019
発送費	1,427,300
サーキュラー印刷費	772,997
要旨集印刷費	1,002,750
大会援助費	500,000
アジア学術交流促進事業	
賛助金	10,000
運営委員会経費	479,646
事務局経費	144,812
特別会計	5,000,000
次年度への繰越金	4,571,694
合計	27,694,207

特別会計

金額 (円)	備考
6,000,000	1996年一般会計より
6,000,000	1997年一般会計より
5,000,000	1998年一般会計より
- 6,000,000	ISDB 準備委員会へ
11,000,000	合計

日本発生生物学会ホームページ委員会規則（別紙3）

申し合わせ事項

5. 日本発生生物学会は、学会のホームページを設置し管理するためにホームページ委員会をおく。

日本発生生物学会ホームページ委員会細則

第1条 本細則は学会のホームページ委員会（以下HP委員会）に関する規則である。

第2条 HP委員会の委員は次の通りとする。

1. 学会事務局幹事長、庶務幹事、会計幹事。
2. 会員の中から会長によって委嘱された若干名。

第3条 第2条2による委員の任期は2年とする。但し重任を妨げない。

第4条 HP委員会の委員長は委員の互選によって決定する。

第5条 HP委員会は以下の業務を行う。

1. HPの設置。
2. HPの更新及びHP掲載希望情報の受け付け。
3. 不適切な情報の削除。
4. その他HP委員会において必要と認められた業務。

第6条 HP委員会の活動は定期的に会長及び運営委員会に報告、審議されるものとする。

第7条 本規則は平成11年5月28日より発効する。

第32回 日本発生生物学会総会議事録

日時：1999年5月27日

場所：東灘区民センターうはらホール

議長選出（八杉）：

会場から姫路工業大学の渡辺憲二会員が推薦され、満場一致で同会員を議長に選出した。

報告事項

1. 会長挨拶 (竹市会長)
2. 大会委員長挨拶 (団大会準備委員長)
 - ・ HP投稿を開始した。
 - ・ 1、2日目で違う会場になった。
 - ・ 甲南大学から多大な援助があった。他に、兵庫科学技術振興財団、日仏協会から援助があった。
3. 庶務報告 (事務局)

会員数	国内	正会員	1 0 7 4 人
		学生会員	3 5 5 人
		賛助会員	4 人
	海外	正会員	5 0 人
合計			1 4 8 3 人 (前年より 8 5 人増)

日産学術研究助成に関する審査結果

京都大学再生医学研究所教授	笹井 芳樹
京都大学・院・理・瀬戸臨海実習所助手	和田 洋
4. DGD編集会議からの報告 (嶋田編集主幹)
 - ・ Impact Factorは順調に伸びている。
 - ・ 投稿数を増やしたい。
 - ・ カラーチャージが安くなったが、さらに安くなるよう検討したい。
 - ・ ブラックウェル社でDGDのon line化がはかられた。
5. 学術会議報告 (星学術会議委員)
 - ・ 学術の動向を見てほしい
 - ・ 科研費の審査員が学術振興会から推薦されるようになった。審査委員数も2倍になった。複合領域、発生生物学細目では第1段審査員が3人から6人へ。
 - ・ ISDB大会の学術会議との共催はだめだった。
6. HP (準備) 委員会報告 (阿形HP委員長)
 - ・ 2001年ISDB大会と第34回大会合同大会に向けて、HP投稿への道づくりを行っている。
 - ・ 今回は要旨の紙での投稿が主、HP投稿が副だったが、HP投稿が主・紙での投稿が副を経て、すべてHP投稿にする予定。

- ・ JSDBのHPを学会事務センターに置く。
 - ・ 今回のHP投稿について
 - ・ 文字バケはなかった。
 - ・ HP投稿できないとの苦情の原因のほとんどはブラウザの設定やバージョンの問題だった。
 - ・ 要旨の公開をギリギリまでしたくないとの要望には今後選択できるようにする。
 - ・ 33回大会では掲示板を設け、高知に置いたサーバーにJSDBのHPからリンクする。会場から会費をカードで払えるようにして欲しい、要旨をワープロファイルで送りたい、古いシステムや機械でも使えるようなシステムにして欲しいという要望があった。
7. 次期大会委員長からの挨拶（川村次期大会準備委員長）
- ・ 2000年5月26日から28日にメイン会場、高知県民グリーンホール、ポスター会場、高知会館。
 - ・ シンポジウムは招待演者と一般公募演者でおこなう。
 - ・ 要旨の投稿はHPが主、紙での投稿が従でおこなう。
8. ISDB大会報告（竹市大会準備委員長）
- ・ プログラムは近藤プログラム委員長とつめている。
 - ・ 財政は切り詰める必要がある。
 - ・ 1年後にSecond Circularをまわすがon lineでいくかどうか検討中。
 - ・ 要旨投稿はOn lineがほとんどだが、紙での投稿をどうするかも検討中。
9. その他
- 次期幹事長を東北大学の井出先生が引き受けて下さった。

審議事項

1. 1998年度決算（事務局、青山会計監査委員）
1998年度決算（別紙1）、会計監査が報告され、承認された。
2. 1999年度予算（事務局）
1999年度予算案（別紙2）が承認された。
3. 会則の付加（HP委員について）
日本発牛生物学会ホームページ委員会規則（別紙3）が承認された。

ホームページ委員会より経過と状況報告

ホームページ委員会・阿形清和（姫工大・理・生命）

経緯報告

<最初の契機>

2001年の第34回・日本発生生物学会大会(京都)を兼ねた第14回・国際発生生物学会の広報委員の依頼を大会委員長の竹市さんと広報委員長の長濱さんから受け、2001年の大会は全面的にホームページ投稿にしたいとの意向を受けたわけです(なぜ、小生に白羽の矢がたったのかは、明白でありました。小生の家内がコンピューター関連のこの方面の作業に詳しいことを彼らが知っていたというだけのことです)。国際発生生物学会のホームページを開設するにあたり、どこかのサーバーを使用するのがまず問題になったわけです。良くホームページを担当した人が自分の大学のサーバーを使ってやっているケースがみうけられますが、公の学会のホームページなのに個人が所属する大学のサーバーを使うのは変に思われたのです(本人が移動したら終わりだし、その本人がホームページを管理し続けなければならなくなる)。国際発生生物学会を担当してくれるエージェントのサーバーを使うという手も考えたのですが、健全なあり方を考えた場合は、まずは発生生物学会のホームページがあり、その一環として国際発生生物学会のホームページがあるのが本来の姿ではないか。多かれ、少なかれ、ホームページを利用しての学会業務の迅速化・簡易化は時代の流れとして来ることは誰の目にも明らかだったわけですが、一方で、実際に誰が、どのように進めるのか、ホームページに親しくない会員にどのように浸透させていくのかを誰も考えていないことも明らかでした。そこで、

－学会のホームページの開設

－第32回神戸大会のホームページの開設

－第32回神戸大会のホームページによる参加・発表申込Ⅰ

－学会ホームページの英文化

－第14回国際発生生物学会のホームページの開設

－第33回高知大会の発表要旨のホームページによる参加・発表申込Ⅱ

－第14回国際発生生物学会のホームページによる参加・発表申込Ⅲ

という段階的なシステム構築を考え、徐々に会員にホームページに慣れてもらい、3年後には、トラブルなくホームページに親しくない会員の方にも発表申込ができるように工夫してみたわけです。残された問題は、誰がやるのかでした。また、当面の問題として、学会事務センターとしてもホームページによる参加・発表受け付けは発生生物学会の大会が初めてのケースであるという技術的な課題も克服しなくてはなりませんでした。

<ホームページ委員会の発足>

具体的に作業を開始するにあたり、学会としてホームページ委員会として正式に認可した上で予算化もしなくてはならなくなりました。そこで、阿形・栃内・事務局をメンバーとして、学会事務センターの計算機室のスタッフと相談しながらシステム構築を開始し、今度の総会で正式に認可されるに至った次第です。作業をシステムティックに行うために、原稿のhtml化は外注し、サーバーへのアップロードは学会事務センターの計算機室に年間契約して、安く・迅速に作業を展開するようにしました。また、DGDのオンライン化とのタイアップについては、栃内さんと事務局の方で動いてもらい学会のホームページからblackwell社のDGDのホームページに飛ぶことで到着をみました(本文まで見るには、いまのところ各会員ごとのSynergy契約が必要です)。このような経緯を経て、現在のホームページのシステムが構築されました。次に、ホームページの現在の状況について説明します。

状況報告

<学会のホームページ—<http://www.bcasj.or.jp/jsdb>>

日本語・英語とも両方のバージョンがすでにホームページ化されています。日本語のページからEnglishと書かれた赤い文字をクリックして頂ければ英語のページに飛びます。海外の方には、http://www.bcasj.or.jp/jsdb/e_index.htmlという英語のホームページに直接入るよう案内しています。どちらのページからも、国際大会・DGDに入れるように設定してあります。

<国内大会>

国内大会の案内については、日本語のホームページからのみ入れます。すでに来年の高知大会の案内がアップロードされています。神戸大会については、高知大会の案内のページの最後に神戸大会のポスターがあり、そこをクリックすれば、今年行われた神戸大会の全ての案内と発表プログラム、また、ホームページ投稿された発表要旨は全て閲覧できます。さらに、高知大会については、川村大会委員長の希望で大会運営についての意見をかわす掲示板を開設してありますので、ご意見板マークをクリックしてもらえれば、高知大学のサーバーに開設されている掲示板に飛びますので、そこから会員の意見を書き込むことができますし、投稿された会員の意見を読むこともできます。

<国際大会>

2001年の大会案内は、先に述べたとおり、日本語からでも英語のホームページからでも入れます。現在は、1stサーキュラーが案内としてだされていますが、来年始めには、2ndサーキュラーがアップロードされる予定です。2001年の国内大会は国際大会と兼ねる形で

行われますので、来年の高知大会では、是非ホームページによる参加・発表申込に慣れ親しんでもらいたいところです。

<DGD・その他>

DGDについては、先ほど述べたように。学会のホームページから入れるように設定してありますが、読めるのはあくまでも目次までです。テキストをon lineで読むには、Synergy契約(年間¥2,500)をblackwell社と各会員が結んでもらう必要がありますので、誤解のないようお願いいたします。その他、賛助会員や公募・集会案内なども盛り込まれていますし、それらについては月初めに必ず更新することにしていきますので、閲覧してください。なお、集会案内や公募で掲載希望のある方は、事務局に申し込んでください。

第32回大会のホームページ投稿についての報告

最後に、今年の神戸大会で試験的にトライしたホームページによる参加・発表申込についての報告をさせていただきます。これらの報告を、是非、来年以降の大会に活かしてもらいたいものです。

<投稿件数>

全312演題中、189件がホームページ投稿され、15件がトライしたがうまく行かずに郵送に切り替え、108件が郵送で投稿されました。また、ホームページと郵送の重複投稿が3件、ホームページから二重送信されたものが2件、ホームページ投稿したつもりがされていなかったケースが2件ありました。

<ホームページ投稿での内容のミス>

従来 of 紙での投稿の習慣からか、

- ・ 演題の領域に氏名を書き込んでいるケースが19件
- ・ 演題冒頭に演題番号を書き込むスペースをわざわざとっているケースが6件
- ・ 本文の冒頭に空白があるケースが95件
- ・ 演題末尾に改行コードを入れているケースが50件

ありました。来年はその点を注意して欲しいとともに、こちらからも同じ間違いを繰り返さないように指示したいと思います。

<投稿できなかったケースの原因と今後の対策について>

ほとんどが、各個人のコンピューターの設定の問題か、入力 of のし方のミスによるものでした。来年は、これらの反省を活かし、問い合わせ体制を整えることと、最悪の場合にはE-mail投稿で対応できるようにしたいと考えています。

<その他の問題点>

「大会以前のホームページにおける要旨の公開は、不利益をまねくおそれがありますの

で、郵送で申しこみます」というご意見がありました。最終的には、オープンになるわけですが、どのタイミングでオープンするかについてが問題視されたわけです。ホームページ投稿の良いところは、プログラムができた段階で、迅速に要旨までホームページで読めるというところにあります。が、ぎりぎりにオープンにしてもらいたいケースも必ずあると思われ。そこで、次回からは、どのタイミングでオープンしたいかの希望に応じるシステムを組み込む予定です。

また、Netscapeの古いバージョンでも対応できるようにして欲しいという要望が総会であったのですが、こちらでいろいろとホームページの作り方の設定を換えて本人にチェックしてもらったのですが、技術的にも金銭的にも労力的にも大変であることが判明し、本人の了解を得てとりあえず今回の設定で継続することになりました。

今後のホームページのあり方と問題点

今後、ホームページの活用がどんどん一般化していくと思います。が、コンピューターを持っていない会員・コンピューターに親しみを感じない会員もいると思いますし、特にシニアの方々にはインターネットとは疎遠の方も多いと思われ。便利さ・安さを理由にホームページ主導にしていくことによって、シニアな会員に疎外感を与えてしまうことは、発生生物学会の良さを失うことにもなりかねないので、手間と費用はかかるかもしれませんが、どんなケースでも手書き・郵送も対応することが必要と思われ。ホームページ委員会の立場はあくまでも、ホームページについて使い心地を良くするよう努めることであって、ホームページに慣れ親しんでいない人にもホームページにしろというスタンスはとっていないことをご理解して頂きたいと思います。

第33回高知大会HPついに開設

高知大学理学部生物学科 川村和夫

日本発生生物学会第33回高知大会のHPが開設されました。下記のサイトにアクセスしてください (<http://www.bcasj.or.jp/jsdb/jsdb.html>)。

HPは大会日程、会場、運営形式などの記事の他に、前回のサーキュラーではお知らせできなかったシンポジウムのテーマについて、準備委員会のたたき台を掲載しております。

ご高覧の上、ご意見などを電子掲示板 (<http://crie.sc.kochi-u.ac.jp/meeting33/hassei.cgi>) に
しどしお寄せください。HPの記事の一部を下記に再掲します。

1. 大会会期 2000年（平成12年）5月25日（木曜日）～5月27日（土曜日）
2. 大会会場 高知県民文化ホール（主会場）、高知会館（ポスター会場）
3. 講演の形態 シンポジウムとポスター

シンポジウムは主会場で実施し、3日間で5～7テーマを消化する予定です。各テーマは原則として、招待講演と一般公募口演より構成します。ポスターは例年通りの様式です。発表希望者は一般公募口演、もしくはポスターのどちらかをお選びいただくことになります。ただし口演数には限りがありますので、ご希望に添えずポスターにお回りいただく可能性もあることをお含みおきください。

4. シンポジウムの企画（案）

- (1)発生を制御するシグナル伝達
- (2)転写因子と発生
- (3)幹細胞と分化制御
- (4)組織の再構築
- (5)極性と非対称
- (6)神経回路網の形成
- (7)発生システムの進化

テーマの最終決定は10月末の予定です。

5. その他の集会について

大会準備委員会が主催する上記シンポジウムとポスター以外に、ワークショップなどの希望がありましたら、お早めに大会準備委員会にご一報ください。

ヨーロッパ発生生物学会参加レポート

東北大・院医 若松 義雄

今年の6月19～23日にかけてノルウェーはオスロで開催されたヨーロッパ発生生物学会に行ってきました。やっぱり学会でもないとなかなかノルウェーなんて行かないだろ

うから良い機会だということだったんですが、動機はちょっと不純でした。

オスロの空港はとても綺麗ですばらしかったんですが、入国審査の際にはゲートに人が殺到し、全然列とか作らないんです。なんかおかしいなと思ったら、案の定学会のオーガナイズはかなり適当で、会場へ行ってもどこがポスター会場でどこが口演の会場かよくわからないし、昼食は3つのグレードからあらかじめ選んで予約しておくんですが、グレードごとに座る席が決められていて自由に座れない。じゃあそんなにいい食事が出たかと言えば全然で、僕は中ぐらいのグレードのを選んだんですが、けっこう高いのに単なるサンドイッチで、ドリンクは別売。ノルウェー人の知り合いとたまたま会って話を聞いてみると、この国の人たちはかなりいい加減（よくいえばおっとりしている）なんだそうです。なにしろオスロ自体が一国の首都とは思えない程小さい町で、やっぱり田舎だからなんでしょうね。

そうはいつでもさすがは国際学会、著名な研究者が大勢来ていました。しかし、シンポジウムのスピーカーの多くがアメリカ人で、ヨーロッパの学会に来た気があまりありませんでした。ただ、発表を聞いていると、Up to date な研究内容を発表しているのはアメリカ人が多く、ヨーロッパのシンポジストの中には”なんで今頃こんなことしてんの？”と思うような前時代的な内容を喋っている人もちらほら。昨今の発生生物学におけるアメリカの優位性みたいなものを反映しているのでしょうか。。。。

発表の内容では、やはり最近Cellにも発表された、Drosophilaのwing diskにおけるcytonemeに関するKornberg博士の発表が興味深く、また大きな拍手を受けていました。cytonemeは脊椎動物細胞の神経管にもあるそうですし、これから流行ること間違いなしですね。それ以外には、かなり多くのグループからレチノイン酸に関する発表がされました。sonic hedgehogの発見で肢芽の前後軸決定のモルフォゲン候補から引きずり降ろされて以来、いまひとつ発生の分野でぱっとしなかったレチノイン酸でしたが、体節と中枢神経系との相互作用への関与など、少し違った形での復権になりそうです。

自分はポスター発表だったんですが、海外の学会にしてはポスターセッションもけっこうな盛り上がりを見せ、そこかしこで熱っぽいディスカッションが行われていました。

おそらくわざとなのでしょうが、学会の日程は夏至にかかっており、高緯度地方のオスロでは夜の12時頃になってやっと夕暮れ時でした。そのあとも真っ暗になることは全然なくて、慣れないとやっぱり調子が狂います。しかし夕暮れ時のオスロの港のかがやくような美しさは一見の価値ありでした。ノルウェーの長い冬を知らないせいでしょうか、美術館で見たムンクの”叫び”の暗い印象と僕のノルウェー体験の間には接点が見出せないまま、この国を後にしました。

生物科学学会連合について

幹事長 八 杉 貞 雄

生物科学学会連合は日本発生生物学会を始め15の学会が会員となり、それぞれ連絡責任者をおき、「会員の活動に関する情報連絡の便宜を図り、必要に応じて連合として意見を公表し、生物科学の発展並びに普及に努める」ことを目的として1998年に発足した。発生生物学会からは幹事長の八杉が連絡責任者となっている。また連合の1999年度の世話人は星 元紀日本動物学会会長である。第1回会議（発生生物学会は岡田前会長出席）は1998年5月8日に開催されて運営の申し合わせなどが話し合われた。第2回は1993年3月25日に開催され、公務員試験「生物」について生物区分からの合格者の採用を増やしてくれるよう各省庁に要望書を提出した。第3回は1999年8月6日に行われ、生物学教育の問題に関して、「数物化系学会教育問題連絡会」に連合として委員（星 元紀世話人、邑田 仁世話人代行）を出すことが決まった。また、このことと関係して入試や新指導要領の件も話し合われた。さらに、「今後の生命科学研究の推進の在り方に関する懇談会」の報告など生物科学をめぐる政府等の動きや、現在国会で論議中の実験動物の規制に関する問題について意見交換がなされた。

このように本連合は生物科学の諸学会が共通にもついろいろな問題に関して議論し、積極的に発言していこうとするものである。会員の皆様でこの連合について質問、希望、要望がおありの方は、学会事務局または八杉 (Email: yasugi-sadao@c.metro-u.ac.jp)までご連絡いただきたい。

科研費審査システムに関する動物学会の提言について

社団法人 日本動物学会では、科研費の審査システムについて会員のアンケート調査や公開討論会を行い、動物学推進将来計画委員会において提言をまとめ、関係する諸団体、省庁に配布しました。

その主要な内容は、(1) 審査員の数を増やすこと、(2) 審査プロセスをフェアに行うための規則を組み込むこと、(3) ユニークなアイデアを積極的に採択する制度を確立すること、(4) 審査システムをサポートする専門家（サイエンス・コーディネーター）制度

を採用すること、です。

この提言に関して、詳細をお知りになりたい方は、発生生物学会事務局または動物学会事務局にお問い合わせ下さい。

日本発生生物学会会則

会則は本則・不則・選挙細則よりなる。

本則

第1条 本会は日本発生生物学会（Japanese Society of Developmental Biologists：略称はJSDB）という。

第2条 本会は発生生物学の進歩と普及をはかることを目的とする。

第3条 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。

1. 欧文誌の刊行
2. 大会の開催
3. その他大会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の会員は正会員、学生会員、賛助会員の3通りとする。

1. 正会員および学生会員は本会の主旨に賛同し、所定の手続きを経て、通常会費を納めたもので、欧文誌などの刊行物の配布を受ける。また、大会での研究発表の申込みをすることができ、総会の議事に参加することができる。
2. 賛助会員は大会の趣旨に賛同し、本会の承認をうけ、所定の賛助会費を納めた個人または法人で、欧文誌などの刊行物の配布をうける。

第5条 本会には次の役員をおく。

会長1名・運営委員若干名・幹事若干名（うち幹事長1名）・欧文誌編集委員若干名（うち編集主観1名）・会計監査2名

1. 会長は本会を代表し、会務を統べる。任期は2年とし、連続3期をつとめることはできない。
2. 会長および運営委員は運営委員会を構成し、本会の要務を審議し会の運営にあたる。

運営委員は会長・3名以上の運営委員・30名以上の正会員あるいは学生会員のいず

れかの要請により開かれる。

運営委員の任期は2年とし連続3期をつとめることはできない。会長が不則の事故などによりその任務を遂行できなくなった時は、運営委員会の議を経て会長代行をおくことができる。

3. 幹事長および幹事は会長を助けて庶務・会計などの日常の会務を処理する。
4. 会計監査は前年度の決算を監査する。
5. 欧文誌の編集主幹および編集委員は編集委員会を構成し、編集に関しての一切の責任を負う。編集主幹および編集委員の任期は3年とする。

第6条 本会の会計年度は1月1日に始まり同年の12月31日に終わる。

第7条 本会は原則として年1回定時総会を開き、会務を協議し、議決する。なお会長が必要と定めたときには、臨時総会を開くことができる。

第8条 本会は定時総会のとき大会を開き研究発表などを行う。大会には大会委員長1名と大会委員若干名をおく。大会委員長は会長が委嘱し、大会委員は大会委員長が委嘱する。

大会の運営は大会委員長の責任において行う。

第9条 正会員および学生会員が会費を1年以上滞納したときには除名することがある。

第10条 大会は地方支部をおくことができる。

第11条 大会の会則の変更は総会において協議し、出席会員の3分の2以上の同意を得なければならない。

付則

第1条 本会の事務所は運営委員会の議を経て会長が委嘱する。

第2条 会費は次の通りとする。

1. 正会員は年額10,000円を年度始めに納入する。
2. 学生会員は年額8,000円を年度始めに納入する。
3. 賛助会員の賛助費は年額30,000円以上とする。

第3条 会長および運営委員の選出方法は次の通り定める。

1. 会長および運営委員（14名）は、正会員および学生会員の投票により選出される。その際、会長はそれぞれ若干名の候補者を推薦することができる。
2. 選挙の管理は運営委員会が委嘱した選挙管理委員（3名）が行なう。

第4条 幹事長および幹事は会長が委嘱し、運営委員会の承認をうける。

第5条 欧分誌の編集は、次の通り行う。

1. 編集主幹は、運営委員会が委嘱する。

2. 編集委員は、3名を運営委員会が選び、さらに、発生生物学の動向を考慮に入れて10名内外を編集主幹が指名する。このうち、3名内外を編集副主幹 (associate editor) に編集主幹が指名する。
3. 以上のほか、専門領域等を考慮して、若干名のadvisory boardを編集主幹が指名する。

第6条 会計監査は運営委員会の議を経て会長が委嘱する。

第7条 本則第3条3項に定める事業を行なうために、委員会を設けることができる。委員は会長が委嘱し、うち1名を委員長とする。

第8条 運営委員会は少なくとも10年毎に、広く会員の意見を聞き、本会のあり方に関して根本的な再検討を加えねばならない。

第9条 本会則は昭和47年1月1日より試行する。

申し合わせ事項

1. 毎年1月1日から総会までの会の運営は会長の責任による暫定予算によって執行し、その会計年度の予算とともに総会で承認をうける。
2. 日本発生生物学学会発足10年目の反省に基づき、会長は、上記の選出方法によって選出された委員以外に3名以内の委員を別に委嘱することができる。
3. 科学研究費助成金の分化・基礎生物科学、細目・発生生物学における審査委員候補者の選定を運営委員会に委ねる。
4. 国際発生生物学学会のboard memberは運営委員会において選出する。
5. 日本発生生物学学会は、学会のホームページを設置し管理するためにホームページ委員会をおく。

付 記

1. 本会則は、1971年8月25日第4回総会にて承認。
2. 付則の第1条、第2条、第3条は昭和49年6月22日、第7回総会に於て変更した。
3. 昭和51年5月28日、第9回総会に於いて前文を追加、本則第5条、第11条を変更した。
4. 昭和57年5月28日、第15回総会に於いて前文を追加、本則第2条、第5条、付則第3条を変更した。
5. 昭和62年5月29日、第20回総会に於いて、本則第4条、第9条、付則第2条、会長選挙試行細則第3条、運営委員選挙細則第3条の学生会員創設および会費の改定に伴う変更が承認された。この改訂は昭和63年1月1日より施行される。

6. 1991年5月24日、第24回総会に於て付則第2条を変更した。
7. 1992年5月29日、第25回総会に於て付則第5条を変更した。
8. 1993年5月27日、第26回総会に於て付則第5条を変更した。
9. 1999年5月27日、第32回総会に於て日本発生生物学会ホームページ委員会細則を承認した。

会長選挙施行細則

- 第1条 本細則は会則に定められた会長の選出に関する手続きである。
- 第2条 選挙の施行に関する一切の管理は選挙管理委員（委員は委員会を構成し、1名を委員長とする）の責任の下で行う。
- 第3条 選挙は正会員および学生会員の単記無記名投票によって行なう。
 1. 投票用紙は選挙管理委員会所定のものに限り、所定の期日までに到着するよう郵送されなければならない。
 2. 投票用紙には被投票者の姓名を明記すること。ただし、同姓同名の被選挙人が2名もしくはそれ以上ある場合は、住所・所属機関名などを付記すること。
- 第4条 第3条に従って記載された投票を有効とする。ただし、2人もしくはそれ以上記名されたり、なに人を指すか判断不可能な記名があった場合は無効とする。その他の有効・無効についての決定は選挙管理委員の協議によって行う。
- 第5条 第一次選挙において有効投票の過半数を得たものを当選者とする。過半数を得たものがない場合は投票数の多いもの3名を第2時選挙の候補者とする。ただし、上位3番目までに同数投票があり、その総数あるいはそれより上位の得票者を含めた数が4あるいは、それを越える場合には、これら同数得票者を第2次選挙の被選挙人とし、第3条に従って単記無記名投票とする。
- 第6条 第2次選挙において最多票を得たものを当選とする。ただし、最多得票数が2名もしくはそれ以上ある場合は管理委員の抽選によって当選者を決定する。
- 第7条 選挙の結果はただちに会長に報告され、当選者への通知は選挙管理委員名で行なわれる。

運営委員選挙施行細則

- 第1条 本細則は会則に定められた運営委員の選出に関する手続きである。
- 第2条 （会長の場合と同じ一省略）
- 第3条 選挙は正会員および学生会員の14名連記無記名投票によって行なう。
 1. 投票用紙は選挙管理委員会所定のものに限り所定の期日までに到着するよう郵送

されなければならない。

2. 投票は14名連記とし、被投票者の姓名を明記すること、ただし、同姓同名の被選挙人が2名もしくはそれ以上ある場合は、住所・所属機関名などを付記すること。

第4条 第3条に従って記載された投票を有効とする。その他の有効・無効についての決定は選挙管理委員の協議によって行う。

第5条 当選者は得票数の多いもの14名とする。ただし、得票数で上位14番目までに同数投票数があり、その総数あるいはそれより上位の得票者を含めた数が15あるいは、それを越える場合は下位の同数得票数について選挙管理委員の抽選により当選者を決定する。

第6条 会長が運営委員より選ばれた場合は次点者をくりあげる

10. (会長の場合と同じ一省略)

日本発生物学会ホームページ委員会細則

第1条 本細則は学会のホームページ委員会（以下HP委員会）に関する規則である。

第2条 HP委員会の委員は次の通りとする。

1. 学会事務局幹事長、庶務幹事、会計幹事。
2. 会員の中から会長によって委嘱された若干名。

第3条 第2条2による委員の任期は2年とする。但し重任を妨げない。

第4条 HP委員会の委員長は委員の互選によって決定する。

第5条 HP委員会は以下の業務を行う。

1. HPの設置。
2. HPの更新及びHP掲載希望情報の受け付け。
3. 不適切な情報の削除。
4. その他HP委員会において必要と認められた業務。

第6条 HP委員会の活動は定期的に会長及び運営委員会に報告、審議されるものとする。

第7条 本規則は平成11年5月28日より発効する。

団ジーン先生、勝磨先生の位相差顕微鏡の三崎臨海実験所での永久保存に関するお願い

この顕微鏡は現在、団勝磨先生が生前に東京・本郷の浜野顕微鏡店の浜野一郎氏に管理依頼され、同氏のご努力により、よく整備され、現在でも十分に使用できる状態にあります。皆様もよくご存じの通り、このBausch & Lomb社の世界で最初の試作第一号機位相差顕微鏡は、戦後ジーン先生がウッズホール臨海実験所を訪ねられた時、アメリカの研究者の尽力で寄贈され、勝磨先生へのみやげとして日本に持ち帰られました。ジーン先生による精子先体反応の発見や勝磨先生の分裂装置に関する一連の研究、遠藤善之先生、岡崎嘉代先生らの受精・発生に関する研究を可能にした生物学史上きわめて重要な顕微鏡です。また、オリンパス、千代田、日本光学などの日本の顕微鏡メーカーが、これをモデルにして位相差顕微鏡を製作したことも有名です。私たちはこの位相差顕微鏡をゆかりの地である三崎臨海実験所に永久保存し、団ジーン、勝磨両先生の功績を後世の学徒に伝えたいと考えております。そのためには単に保存するだけでなく、しっかりとしたケースに入れて実験所の図書室等で研究成果やエピソードとともに展示し、訪れる学生や研究者に常時展示し、時には検鏡できる状態を維持することが必要です。また毎年、顕微鏡のクリーニング、調整等も実施する必要があります。（これは浜野氏に依頼できるものと考えております。）そのため、顕微鏡を安全にかつ永く確保できる仕様のケースとテーブル、若干のポスターパネルの製作・購入費用、そして毎年の調整費用にあてるため、趣旨にご賛成いただける方々からご芳志を集めさせていただきたく思います。この呼びかけは日本発生生物学会、日本動物学会、日本細胞生物学会の会員の皆様、その他関係者の方々に行っております。一口3千円で募金をいたしますので、ご協力を心からお願いいたします。ご芳志を以下の口座に郵便為替にてご送金頂ければ幸甚に存じます。

呼びかけ人代表 平本幸男

口座：横浜銀行三崎支店（店番号551）（普通）1133796

名義：ジーン先生顕微鏡基金

呼びかけ人（あいうえお順）

雨宮昭南、池田満里子、石川統、磯野直秀、井上信也、上村伊佐緒、岡良隆（会計）、岡田益吉、久保田宏、黒岩常祥、酒井彦一、佐藤英美、嶋昭紘、田中省二、団まりな、根本心一、萩原泰子、東中川徹、平本幸男（呼びかけ人代表）、星元紀、松田良一（庶務）、馬淵一誠（庶務）、丸山工作、三木堆子、毛利秀雄、守隆夫、森沢正昭、安増郁夫、柳町隆造

ライフサイエンス及び宇宙医学分野の国際宇宙ステーション等利用研究テーマ 1999年国際公募のご案内

日、米、欧、加、露によって建設される国際宇宙ステーションは、昨年度より組立が開始されました。これに伴い、ライフサイエンス及び宇宙医学研究分野において、スペースシャトル実験を含む宇宙ステーション利用研究テーマを国際公募いたします。これは国際宇宙ステーション計画に参加する各機関の実験装置等を効率的に相互利用し、最大の科学的成果を得ることを目的とします。

この公募には、国際宇宙ステーション参加国の関係機関（NASDA、NASA、ESA、CSA、CNES、DLR（注））が参加しています。公募の対象となるのは、ライフサイエンス及び宇宙医学分野（以下、国際的な定義に基づき、単に「ライフサイエンス」と称する）に関する宇宙実験テーマです。実施時期は2003年中頃から国際宇宙ステーションの組立完了までの期間を対象とします。提案者は上記参加機関から今回の国際公募に提供される実験装置のいずれかを利用した実験を提案することができます。以下の事項をご勘案の上、奮って応募下さい。

【国際公募制度の概要】

●応募資格

- 1) 提案する研究内容を適切に実施できる能力を有していること。
- 2) NASDAの業務委託先である（財）日本宇宙フォーラム（以下、JSFと称する）との研究契約締結が可能であること。

※応募者の国籍、所属機関の所在地（国内外）は問いません。ただし、国外の機関からの提案の実施に係る費用を、NASDAが負担することはありません。

●国際公募対象…2003年中頃から国際宇宙ステーションの組立完了までに行われるライフサイエンス分野の宇宙実験の提案を対象とします。宇宙ステーション（日本の実験モジュールを含む）利用の他に、スペースシャトル等の利用も含まれます。

●実験装置…今回の国際公募に参加する各機関（NASDA、NASA、ESA、CNES、DLR）が国際公募に提供した装置のいずれかを利用する宇宙実験テーマを募集します。

●応募受付期間

募集案内発出：平成11年8月30日から

仮申し込み（Letter of Intent）〆切：平成11年10月1日

応募書類国内〆切：平成11年11月1日（JSF内ライフサイエンス国際公募事務局必着）

●選定…受付機関による予備選考、参加各機関の研究者から構成される国際評価パネルによる科学評価、装置提供機関及び利用側の機関が中心となる技術（搭載性）評価、参加各機関の方針に基づく再評価と優先順位付けが行われます。国際会合での審議・承認を経て、宇宙実験候補テーマが選定されます（平成12年5月予定）。

●研究実施形態…詳しくは募集案内をご覧ください。

●予算…研究に係る予算は提案者の所属機関とNASDA（JSF）が調整し、予算要求を含め平成12年度以降に予算処置を行います。

【提案書作成講習会など】

提案書の表現、構成を改善するための提案書作成講習会および添削を計画しております。

【問い合わせ先】

財団法人日本宇宙フォーラム（JAPAN SPACE FORUM）

公募研究推進部内 ライフサイエンス国際公募事務局 担当：福井・山中

電話：03-3459-1653 FAX：03-5470-8426

URL：http://www.homepage.co.jp/jsforum E-mail：life@jsforum.or.jp

上記各事項の詳細については現在検討中であり、8月30日以降に詳細な募集案内等を上記ホームページに掲載いたします。

注）NASDA：宇宙開発事業団、NASA：アメリカ航空宇宙局、ESA：欧州宇宙機関、CSA：カナダ宇宙庁、CNES：フランス国立宇宙研究センター、DLR：ドイツ航空宇宙センター

第49回 科学講演会の御案内

『1997年にクローン羊「ドリー」が誕生し、“クローン人間”の可能性が示唆されたことから注目を浴びて以来、動物の細胞や臓器を人間の病気の治療に利用する「異種移植」の臨床応用への動き、細胞から移植用組織をつくる「再生治療」の可能性、細胞核一個か

らの臓器再生や拒絶反応が起きない細胞移植法といった近未来的ニュースが矢継ぎばやに発表されています。これらは急激に発展した生命科学分野における研究成果の一部であり、21世紀は「生命科学の時代」といわれています。

今回、これら生命科学分野の研究を先導され、斯界の権威であられるお二人の先生をお招きして、最先端の話を分かりやすくお話していただくこととしました。

動物の発生過程は遺伝的にプログラムされており、どの部位が何になるか運命付けられていると考えられていましたが、新しく発見された誘導物質を用いると、細胞の運命を変えることができ、各種臓器・器官、組織を自由に作り出せるようになりました。そのことで何がわかり、どのような可能性が見出されたのかについて、また、人間にとって重要な器官である脳がどのような分子・細胞メカニズムで作られ、高度な機能を獲得するのかにふれながら、脳研究の今後の展望をお話していただきます。

本講演会は、今後の生命科学研究の動向を理解する上で必ず役立つと考えています。御期待ください。』

とき：平成11年9月22日(水) 開演18時00分 終演20時45分

ところ：有楽町朝日ホール(有楽町マリオン11階)

東京都千代田区有楽町2-5-1(JR有楽町駅前)

テーマ：“よくわかる生命科学の新しい展開”

I. クローン生物と臓器形成の現在 東京大学大学院総合分化研究科教授 浅島誠

II. 脳と神経の働きに挑む 東京大学医化学研究所教授

理化学研究所脳科学総合研究センター、発生・分化研究グループディレクター 御子柴克彦

その他：入場無料、予約の必要はありません。

定員638名(当日会場先着順・開場：17時30分)

御来聴の方には、後日講演記録を進呈いたします。

主催：東レ科学振興会

後援：日本動物学会・日本発生生物学会・日本生化学会

問い合わせ先：財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜1-8-1(東レビル) TEL 047-350-6103

第16回(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団公開シンポジウム「21世紀のバイオインダストリーの展望」

主催 : (財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後援 : 科学技術庁、厚生省

日時 : 平成11年10月16日(土) 12:50~18:00

会場 : 経団連ホール(東京都千代田区大手町)

地下鉄大手町下車1分 TEL 03-3279-1411

オーガナイザー : 香川靖雄(女子栄養大学副学長)

別府輝彦(日本大学生物資源科学部教授)

プログラム :

「挨拶」中村寛之助(財団理事長)

「はじめに」香川靖雄

1. 微生物が拓く21世紀のバイオテクノロジー

別府輝彦(日本大学生物資源科学部教授)

2. 21世紀の創薬における微生物の役割

大村智(北里研究所所長)

3. Agricultural biotechnology in the 21st century.

Mr. Robert L. Harness (Director, Monsanto Co.)

4. 21世紀のゲノム医学 中村祐輔(東京大学医科学研究所教授)

5. 21世紀の医療 香川靖雄(女子栄養大学副学長)

6. 総合討論 香川靖雄、別府輝彦

参加方法 : 参加費無料。はがき又はFAXにて住所・氏名・所属・電話番号を明記のうえ、下記へお申し込みください。参加証をお送りいたします。但し、定員(420名)になり次第締め切ります。

申込締切 : 10月6日

申込先 : (財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194-8533 町田市旭町3-6-6 Tel 042-725-2576 Fax 042-722-8614

千里ライフサイエンスシンポジウム 「脳の幹細胞－脳の再生医学への道－」

日時 平成11年11月16日(火) 午前10時～午後5時

場所 千里ライフサイエンスセンタービル5階ライフホール

(地下鉄御堂筋線千里中央駅北口すぐ)

大阪府豊中市新千里東町1-4-2

主催 財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協賛 株式会社千里ライフサイエンスセンター

コーディネータ 大阪大学大学院医学系研究科教授 岡野栄之

プログラム

1. はじめに 岡野栄之
2. 神経幹細胞の同定とその神経疾患への応用 岡野栄之
3. 成熟動物における神経幹細胞の再生-分化転換と網膜再生- 理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー 梶原一人
4. 神経幹細胞の発生・分化・再生 東京大学大学院医学系研究科助教授 中福雅人
5. ラット海馬由来神経系幹細胞の分離・培養と神経分化過程の解析 京都大学大学院医学研究科助手 高橋淳
6. 成体幹細胞を用いたドーパミン作動性ニューロン分化機構の解析 協和発酵工業(株) 東京研究所研究員 桜田一洋
7. パーキンソン病に対する神経移植再生療法 岡山大学医学部助手 伊達勲
8. おわりに 岡野栄之

参加費(講演要旨集合含む)

会員(大学、公官庁、賛助会員) : 6,000円

非会員 : 8,000円

学生 : 3,000円

定員 300名

参加申し込み方法 !氏名、"勤務先、所属、役職名、所在地、〒、電話、FAX番号を明記の上、郵便またはFAXで下記宛お申し込みください。参加費は申し込み後に大和銀行千里中央支店普通預金No. 4601085財団法人千里ライフサイエンス振興財団口座宛お振込ください。なお振込の際、振込者名の前にS9と御記入ください。ご送金確認次第、領収書兼参加証を送付いたします。

申込先 (財)千里ライフサイエンス振興財団 シンポジウム係

〒565-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2 千里ライフサイエンスセンタービル8階

tel. (06)6873-2001, fax. (06)6873-2002 E-mail: senrilsf@commercecity.or.jp 担当: 田中晃

第14回「大学と科学」公開シンポジウム セッション名「生殖細胞：その誕生と振る舞い」

開催日 平成11年11月27日(土)、28日(日)

場所 朝日ホール(東京)

平成11年11月27日(土)

A. 挨拶(10:00~10:10) (組織委員・文部省)

B. さまざまな生物で生殖細胞が作られる仕組み(10:10~15:00)

司会 岩手女子看護短期大学教授 小川英行

1. 酵母に見る生殖細胞の起源 東京大学大学院理学系研究科教授 山本正幸
2. プラナリア全能性細胞から生殖細胞への分化 姫路工業大学理学部教授 渡辺憲二
3. 線虫における生殖細胞の形成 東京大学大学院理学系研究科助手 杉本亜砂子

質疑応答

昼食(12:00~13:15)

司会 東京工業大学生命理工学部教授 岸本健雄

4. ショウジョウバエにおける生殖細胞の形成 筑波大学生物学系講師 小林悟
5. カエルの卵に見る減数分裂の原理 九州大学理学部教授 佐方功幸
6. 魚類における卵と精子のできる仕組み

岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所所長 長濱嘉孝

質疑応答

休憩(15:00~15:15)

C. 生殖細胞の特質(15:15~17:00)

司会 愛知淑徳大学文学部教授 堀田康雄

1. 植物における生殖細胞形成 京都大学大学院理学研究科教授 岡田清孝
2. 個性を生み出す遺伝的組換えの仕組み 国立遺伝学研究所教授 小川智子
3. 生物細胞はなぜ不老不死か 東京工業大学生命理工学部教授 石川冬木

質疑応答

平成11年11月28日(日)

D. 哺乳動物の生殖細胞と細胞工学(10:00~12:20)

司会 熊本大学理学部教授 安部眞一

1. マウス始原生殖細胞の発生

大阪府母子保健総合医療センター研究所部長 松居靖久

2. マウスにおける精子形成の機構 大阪大学微生物病研究所長 西宗吉武

3. マウスにおける雌雄生殖細胞の発生と分化

京都大学再生医科学研究所教授 中辻憲夫

4. 体細胞を操作してクローン牛を作る 近畿大学農学部教授 角田幸雄

質疑応答

昼食 (12:20~13:30)

E. 特別講演I (13:30~14:15)

司会 筑波大学名誉教授 岡田益吉

「マウスにおける体細胞核の生殖細胞への移植」(仮題)

ハワイ大学医学部教授 柳町龍造

F. 特別講演II (14:15~15:00)

司会 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所所長 毛利秀雄

「生殖細胞研究と社会」 三菱化学生命科学研究所室長 米本昌平

休憩 (15:00~15:15)

G. パネルディスカッション (15:15~16:45)

司会 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所室長 長濱嘉孝

東京大学大学院理学系研究科教授 山本正幸

パネリスト 近畿大学農学部教授 角田幸雄

山形大学医学部教授 廣井正彦

岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所所長 毛利秀雄

ハワイ大学医学部教授 柳町龍造

三菱化学生命科学研究所室長 米本昌平

会員移動

<新入会員>

(氏名)	(所属)	〒	(住所)	(①テーマ・②材料)
佐藤 玄	広島県組織再生プロジェクト	739-0046	東広島市鏡山3-10-32	①再生学 ②ラット肝細胞
Cabrera Jocelyn	東工大・生命理工	226-8501	横浜市緑区長津田4259	①プラナリア生殖様式転換に関する研究 ②リュウキュウナミウスムシ
金井 克晃	東京大学大学院農学生命科学研究科獣医解剖	113-0032	文京区弥生1-1-1	①生殖腺発生・性分化・精子発生 ②マウス
勝蔵 由樹	石巻専修大学理工学部生物生産工学科	986-8580	石巻市南境新水戸1	①形態形成 ②カイウミヒドラ
矢野 環	大阪府立母子保健総合センター研究所	594-1101	和泉市室堂840	①初期発生における体軸決定、生殖細胞形成 ②ショウジョウバエ
栗崎 健	基礎生物学研究所細胞増殖	444-8585	岡崎市明大寺町字西郷中38	①神経発生学 ②Drosophila
黄 振勇	国立遺伝学研究所発生工学	411	三島市谷田1111	①マウス胎児生殖細胞の体外培養・遺伝子導入と動物個体の再構築方法の研究 ②マウス
岡南 政宏	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科	630-0101		①発生過程における遺伝子発現調節・核マトリックスと遺伝子発現 ②マウス
小坂 泰弘	帝京大学・薬	199-0195	神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐1091-1	①ニワトリ皮膚に発現するホメオボックス遺伝子 ②ニワトリ
友成 さゆり	徳島大学工学部生物工学科	770-8506	徳島市南常三島町2-1	①脊椎動物の形態形成 ②ニワトリ
井上 淑子	徳島大学工学部生物工学科	770-8506	徳島市南常三島町2-1	①節足動物の形態形成 ②フタホシコオロギ
平本 正輝	国立遺伝学研究所	411-8540	三島市谷田1111	①神経発生
Darras Sebastien	東工大・生命理工	226-8501	横浜市緑区長津田4259	①Neural tissue formation in ascidian. ②マボヤ
金子 優子	電子技術総合研究所超分子部	305-8568	つくば市梅園1-1-4	①イモリ網膜再生 ②アカハライモリ
乳井 誠一郎	キッセイ薬品工業(株)臨床開発部第1室第2課	112-0002	文京区小石川3-1-3	①メダカ初期発生(体軸)・酵素欠損マウス作成・解析 ②メダカ・マウス

酒巻 和弘	京都大学ウイルス研究 所	606-8507	京都市左京区聖護院川原町	①細胞死 ②マウス
楠田 聡	北海道立水産孵化場	061-1433	恵庭市北柏木3-373	①魚類発生生理 ②ニジマス・サケ・キンギョ
中尾 一和	京都大学大学院医学研 究科	606-8507	京都市左京区聖護院川原町54	①ヒト組織の発生分化・再生
三戸 太郎	東京大学大学院理学系 研究科地質学専攻	113-0033	文京区本郷7-3-1	①棘皮動物の発生と進化 ②チビイトマキヒトデ・ニッポンウミシダ
北野 健	熊本水産研究センター	869-3603	天草郡矢野町中2450-2	①性分化 ②ヒラメ(<i>Paralichthys olivaceus</i>)
南 真樹	東京大学分子細胞生物 学研究所	113-0032	文京区弥生1-1-1	①ショウジョウバエの翅を形作るパターン形成 遺伝子群の解析 ② <i>Drosophila melanogaster</i>
石関 清人	岩手医科大学・歯学部・ 口腔解剖	020-8505	盛岡市中央通1-3-27	①軟骨細胞の培養 ②マウスメッケル軟骨細胞
菅野 雅元	広島大学医学部免疫学 寄生虫学	734-8551	広島市南区霞1-2-3	① <i>Polycomb</i> 遺伝子群の機能 ②マウス
笹川 一郎	日本歯科大学新潟歯学 部口腔解剖教室	951-8580	新潟市浜浦町1-8	①脊椎動物の比較発生 ②サメ・エイ類、真骨魚類、有尾両生類、アリ ゲーター、オッポサム
山崎 英俊	鳥取大学医学部生命科 学科・免疫学	683-8503	米子市西町86	
立花 和則	東京工業大学生命理工 学部生体機構学科	227-8501	横浜市緑区長津田町4259	
荻野 由紀子	久留米大学先端癌研究 センター	830-0011	久留米市旭町67	①脊椎動物における薬物応答の分子メカニ ズムの解析 ②マウス・メダカ・ゼブラフィッシュ
(学) 上田 こずえ	広島大学大学院理学研 究科生物科学専攻	739-8526	東広島市鏡山1-3-1	①細胞分裂 ②HeLa細胞
(学) 小藪 芳男	理化学研究所	305-0074	つくば市高野台3-1-1	①神経発生 ②アフリカツメガエル
(学) 藤本 哲広	京都大学医学研究科分 子遺伝学教室	606-8507	京都市左京区聖護院川原町54	①造血発生 ②ES細胞
(学) 飯島 実	東京大学大学院理学系 研究科生物科学専攻	113-0033	文京区本郷7-3-1	①細胞間相互作用 ②棘皮動物門ウニ綱
(学) 矢嶋 伊知朗	東北大学大学院理学研 究科生物科学専攻	980-0578	仙台市青葉区荒巻字青葉	①色素細胞の発生システムとその進化 ②ハツカネズミ・マボヤ

(学)	菊田 寛	埼玉大学理学部生体制御学科発生学研究室	338-8570	浦和市下大久保255	②ゼブラフィッシュ
(学)	濱口 卓士	山口大学理工学研究科	753-8516	山口市吉田1677-1	①発生遺伝学 ②Drosophila
(学)	大江 智也	九大・理・生物・発生	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1	①発生生物学・細胞周期 ②アフリカツメガエル
(学)	金谷 直子	JT生命誌研究館(大阪大学大学院)	569-1125	高槻市紫町1-1	①中軸骨格の部域化 ②ニワトリ・ウズラ
(学)	西野 光一郎	東大院・農生命・応用遺伝	113	文京区弥生1-1-1	①性分化・精巢形成機構の解明 ②EGFP transgenic mouse
(学)	川島 武士	京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学教室	606-8502	京都市左京区北白川追分町	①脊索動物門の初期発生 ②アフリカツメガエル・マボヤ
(学)	田崎 啓	姫路工業大学・理・生命	678-1297	兵庫県赤穂郡上群町1475-2	①神経発生 ②プラナリア
(学)	吉牟田 純一郎	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設発生遺伝部門	862-0976		①遺伝子トラップ法による挿入変異マウスの解析 ②マウス
(学)	堀 幸子	京都大学薬学部遺伝子薬学講座	606-8304	京都市左京区吉田下阿達町46-29	①FGFs(繊維芽細胞増殖因子ファミリー)の形態形成における役割 ②繊維芽細胞増殖因子(fibroblast growth factor: FGF)
(学)	鈴木 勝也	筑波大学バイオシステム研究科	305-8572	つくば市天王台1-1-1	①細胞性粘菌の配偶子間相互作用に関わる研究 ②細胞性粘菌 Dictyostelium discoideum
(学)	田村 千恵	熊本大学理学部生物科学科生体機能学講座	860-8555	熊本市黒髪2-39-1	①両生類の誘導 ②イモリ
(学)	遠矢 周作	九州大学理学部生物学科	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1	①生物のパターン形成の数理的研究 ②ゼブラフィッシュ
(学)	秦 敏宏	筑波大学生物科学研究科	305-8572	つくば市天王台1-1-1	①有性生殖時の細胞間相互作用に関わる分子の解析 ②細胞性粘菌 Dictyostelium discoideum
(学)	中谷 雅明	横浜市立大学医学部第2生化学	236-0004	横浜市金沢区福浦3-9	①極性決定のメカニズム ②Xenopus laevis
(学)	河村 憲良	石巻専修大学工学部生物生産工学科		石巻市南境新水戸1	①カイウミヒドラ初期発生を制御するペプチド性シグナル分子 ②カイウミヒドラ
(学)	亦勝 和	国立遺伝学研究所	411-8540	三島市谷田1111	①パターン形成 ②キイロショウジョウバエ

(学)	岡本 郁弘	北海道大学大学院地球 環境科学研究科生態環 境科学専攻生態遺伝学	060-0810	札幌市北区北10条西8・北海道 大学遺伝子実験施設	①マウス初期発生・X染色体不活性化 ②マウス
(学)	松井 純子	北海道大学大学院地球 環境科学研究科	060-0810	札幌市北区北10条西8・北海道 大学遺伝子実験施設	①細胞分化 ②マウス
(学)	小林 一也	東工大・生命理工	226-8501	横浜市緑区長津田4259	①プラナリア生殖様式転換に関する研究 ②リュウキュウナミウズムシ
(学)	堀田 耕司	京大・院理・生物科学	606-8502		①ホヤBrachyuryのターゲット・脊索形成の遺 伝子カスケード ②Ciona intestinalis
(学)	河村 知見	徳島大学総合科学部	770-8502	徳島市南常三島町1-1	①形態形成 ①ゼブラフィッシュ
(学)	松永 英治	東北大・加齢研・分子神 経		仙台市青葉区星陵町4-1	①視蓋の発生 ②ニワトリ
(学)	明神 未代子	岡山大学理学部生物学 教室進化発生	700-0082		①脊椎動物の頭部の進化過程を理解するた めに無類カワヤツメを用いて比較分子発生 生物学的に検索する ②カワヤツメ
(学)	宮脇 克行	徳島大学工学部生物工 学科	770-8506	徳島市南常三島町2-1	①フタホシココロギの肢再生メカニズム ②フタホシココロギ
(学)	木村 真輔	徳島大学工学部生物工 学科	770-8506	徳島市南常三島町2-1	①肢再生 ②フタホシココロギ
(学)	田尾 嘉萱	徳島大学工学部生物工 学科	770-8506	徳島市南常三島町2-1	①ニワトリの形態形成メカニズム ②ニワトリ
(学)	田口 俊亮	京大・院・理・動物・分子 発生	606-8502	京都市左京区北白川追分町	①後口動物の進化 ②ヒメギボシムシ(Ptychodera flava)
(学)	原口 竜摩	久留米大学先端癌治療 研究センター細胞発生工 学部門	830-0011	久留米市旭町67	①上皮-間葉相互作用を介した外生殖器形成 の過程の解析 ②マウス・チェック
(学)	佐藤 剛毅	京大・院・理・動物・分子 発生	606-8502	京都市左京区北白川追分町	①分子系統発生学 ②棘皮、半索、脊索動物
(学)	広瀬 大也	東京大学教養学部生物	153-8902	目黒区駒場3-8-1	①細胞の形態・移動と細胞分化の相関 ②マウス骨格筋細胞株C2C12
(学)	岡本 健吾	九州大学理学部生物学 科	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1	①初期発生における細胞周期制御 ②アフリカツメガエル
(学)	栗山 正	関西学院大学		西宮市上ヶ原1-1-155	①脳の初期発生

(学)	井口 尚子	大阪大学微研動物実験学	565-0871	吹田市山田丘3-1	②アフリカツメガエル ①精子形態形成 ②マウス
(学)	森 一夫	琉球大学理学部物質地球科学科物理系光学研	903-0129	沖縄県西原町字千原1	①老化への物理的アプローチ ②植物
(学)	神藤 智子	名古屋大学理学部分子生物学科第5講座	464-8602	名古屋市千種区不老町	②ゼブラフィッシュ
(学)	森谷 光昭	広島大学理学部	739-8256	東広島市鏡山1-3-1	①ユニGストリング結合タンパク質の機能解析 ②バフウニ
(学)	牛田 奈緒子	東大分生研		文京区弥生1-1-1	①ショウジョウバエ翅のパターン形成 ②ショウジョウバエ
(学)	川嶋 貴治	神戸大学大学院自然科学研究科	657-8501	神戸市灘区六甲台町1-1	①鳥類の発生工学 ②ニワトリ(Gallus domesticus)
(学)	滋野 修一	岡山大学理学部付属臨海実験所	701-4303	邑久郡牛窓町鹿忍130-17	①脳発生様式の多様性と収束進化・頭足類の器官形成 ②頭足類
(学)	石村 昭彦	新潟大学理学部生物科	950-2181	新潟市五十嵐二ノ町8050	
(学)	竹内 雅貴	基礎生物学研究所形態形成研究部門	444-0867	岡崎市明大寺町字西郷中38	
(学)	松野 元美	国立遺伝学研究所	411-8540	三島市谷田1111	①神経系の形態形成 ②Drosophila melanogaster
(学)	藤井 秀文	鹿児島大学理工学研究科	890-0065	鹿児島市郡元2	
(学)	工藤 久智	東京工業大学生命理工学研究科生命情報専攻	226-8501	横浜市緑区長津田町4259	①骨形成 ②ゼブラフィッシュ
(学)	須藤 英文	千葉大学・医・発生生物		千葉市中央区亥鼻1-8-1	
(学)	藤田 律	京都大学理学部			

<退会>

中津 武	田中 澄子	沢田 健	山野 恵祐	立花 和則	柳澤 尚武
植竹 由美	早坂 直人	斧 芳江	猪又 顕	足立 仁	秋葉 栄治
岡戸 清	荒川 伴子	森田 美芳子	池田 理化	共進理工	Darszon Alberto
金谷 一司	林 基治	石井 衛	岸本 明子	高橋 優子	久保田 宏
方村 美保	田中 正史	金子 朋未	水谷 晃子		

<会員資格変更>

学生→正会員

永井 建治	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター分子神経生物学研究室	305-0074	つくば市高野台3-1-1
坂本 信之	(株)生命誌研究館	569-1125	高槻市紫町1-1
加納 聖	岩手大学農学部獣医学科家畜解剖講座	020-8550	盛岡市上田3-18-8
川辺 祥子	国立小児病院小児医療研究センター小児薬理研究部	154-8509	世田谷区太子堂3-35-31
小川 麻里	慶應義塾大学生物教室	223-8521	横浜市港北区日吉4-1-1
木村 淳	東北大学加齢医学研究所分子神経研究分野	980-8575	仙台市青葉区星陵町4-1
佐藤 ゆたか	京都大学大学院理学研究科動物学専攻分子発生生物学研究室	606-8502	京都市左京区北白川追分町
永野(大迫) 麗子	国立感染症研究所獣医科学部実験動物開発	162-8640	新宿区戸山1-23-1
倉 暁彦	コスモ・バイオ(株)開発部	135-0016	江東区東陽2-2-20
和田 修一	東京都立大学大学院理学研究科生物科学専攻発生プログラム研究室	192-0397	八王子市南大沢1-1
遠藤 哲也	広島県産業科学技術研究所広島県組織再生プロジェクト	739-0046	東広島市鏡山3-10-32
斎藤 麻衣	国立精神・神経センター神経研究所遺伝子工学部	187-8502	小平市小川東町4-1-1

国内→海外

山崎 由起子	Dept. of Anatomy and Reproductive Biology, Sch. of Med., Univ. of Hawaii at Manoa		Auxiliary Services, 1951 East-West Rd., Honolulu, HI 96822, U.S.A.
高橋 俊雄	Dept. Developmental and Cell Biology, Univ. of California		Hans Bode Lab.(R.4103, BS11), Irvine, CA 92697, U.S.A.
川上 泰彦	c/o Juan Carlos, Izpisua Belmonte, Gene Expression Lab.		10010 North Torrey Pines Rd., La Jolla, CA 92037,
尾身 実	Dept. of Cell and Molecular Biology, Tulane Univ.		2000 Persival Stern Hall, 6400Freret St., New Orleans, LA 70118, U.S.A.

海外→国内

若松 義雄	東北大学大学院医学系研究科細胞生物学講座器官構築学分野	980-8575	仙台市青葉区星陵2-1
下野 明彦	基礎生物学研究所発生生物学研究系細胞分化研究部門	444-8585	岡崎市明大寺町字西郷中38

<所属機関変更>

田沢 栄五郎	神奈川大学総合理学研究所	259-1293	平塚市土屋2946
田中 智	東京大学大学院農学生命科学研究科応用動物科学専攻細胞生化学研究室	351-0114	文京区弥生1-1-1
平田 たつみ	国立遺伝学研究所脳機能研究部門	411-8540	三島市谷田1111
能瀬 聡直	東京大学理学部物理学科	113-0033	文京区本郷7-3-1
栗崎 知浩	東京都臨床医学総合研究所細胞生物学研究部門	113-8613	文京区本郷3-18-22

多田 高	国立遺伝研究所発生工学	411-8540	三島市谷田1111
藤森 俊彦	京都大学大学院医学研究科病理系腫瘍生物学講座	606-8501	京都市左京区吉田近衛町
丹羽 勝利	科学技術振興事業団近藤誘導分化プロジェクト	606-8305	京都市左京区吉田河原町14 近畿地方発明センタービル
沼宮内 隆晴	青森大学工学部生物工学科	755-8505	青森市幸畑2-3-1
富樫 伸	北里大学理学部生物科学科分子発生学講座	228-8555	相模原市北里1-15-1
小阪 美津子	(財)倉敷成人病センター医科学研究所	710-8522	倉敷市白楽町250
太田 訓正	熊本大学大学院医学研究科神経化学講座	860-0811	熊本市本荘2-2-1
小瀬 博之	徳島大学医学部動物実験施設	770-8503	徳島市蔵本町3-18-15
永野(大迫) 麗子	国立感染症研究所獣医科学部実験動物開発	162-8640	新宿区戸山1-23-1
高橋 雄	国立医薬品食品衛生研究所毒性部第4室	158-8501	世田谷区上用賀1-18-1
二階堂 昌孝	水産庁養殖研究所玉城分室細胞工学研究室	519-0423	三重県度会郡玉城町屋田 224-1
澤田 篤志	国立遺伝学研究所初期発生部門	411-8540	三島市谷田1111
新屋 みのり	国立遺伝学研究所初期発生部門	411-8540	三島市谷田1111
坂口 拓哉	国立遺伝学研究所初期発生部門	411-8540	三島市谷田1111
神藤 智子	国立遺伝学研究所初期発生部門	411-8540	三島市谷田1111
野呂 知加子	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター実験動物開発室	305-0074	つくば市高野台3-1-1
光永 敬子	広島大学理学部数理分子生命理学専攻分子遺伝学研究室	739-8526	東広島市鏡山1-3-1
種田 保穂	横浜国立大学教育人間科学部生物学教室	240-8501	横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2
前田 美香	東北大学加齢医学研究所分子発生研究分野	980-8575	仙台市青葉区星陵町4-1
中江 裕樹	(株)日立製作所中央研究所バイオシステム研究室	185-8601	国分寺市東恋ヶ窪1-280
高倉 暁彦	コスモ・バイオ(株)開発部	135-0016	江東区東陽2-2-20
鈴木 操	熊本大学動物資源開発研究センター技術開発分野	860-0811	熊本市本荘2-2-1
荒井 克俊	北海道大学水産学部育種培養学講座	041-8611	函館市港町3-1-1
吉岡 秀文	兵庫教育大学自然系生物	673--1494	兵庫県加東郡社町下久米 942-1
田中 聡	大阪府立母子保健総合医療センター研究所病因病態部門	594-1101	和泉市室堂町840
和田 修一	東京都立大学大学院理学研究科生物科学専攻発生プログラム研究室	192-0397	八王子市南大沢1-1
遠藤 哲也	広島県産業科学技術研究所広島県組織再生プロジェクト	739-0046	東広島市鏡山3-10-32
伊藤 美紀子	徳島大学医学部栄養化学教室	770-8503	徳島市蔵本町3-18-15
斎藤 麻衣	国立精神・神経センター神経研究所遺伝子工学部	187-8502	小平市小川東町4-1-1
恒川 直樹	三菱化学生命科学研究所分子生殖発生	194-8511	町田市南大谷11

桑原 佐知	大阪府立大学農学部獣医解剖学講座	599-8531	堺市学園町1-1
越田 澄人	科学技術振興事業団ERATO近藤誘導分化プロジェクト	606-8305	京都市左京区吉田河原町14
橋本 和枝	東京大学医学系研究科脳神経医学専攻神経生物学講座	113-0033	文京区本郷7-3-1
酒井 章衣	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所発生生物学研究系生殖研究部門	444-8585	岡崎市明大寺町字西郷中38
百瀬 剛	姫路工業大学理学部生命科学科細胞制御(1)講座	678-1297	兵庫県赤穂郡上郡町光都3-2-1
松本 潤	工業技術院生命工学工業技術研究所生体分子工学生体制御研究室	305-8566	つくば市東1-1

<所在地変更>

沢田 知夫	山口大学医学部第一解剖学講座	755-8505	宇部市南小串1-1-1
山田 知子	熊本大学大学院医学研究科神経分化学講座	860-0811	熊本市本荘2-2-1

[賛助会員]

生命誌研究館	〒569-1125	高槻市紫町1-1 TEL 0726-81-9750
先端テクノロジーをサポートする日京テクノス(株)	〒113-0033	文京区本郷2-17-8鈴木ビル TEL 03-3814-2066
三菱化学生命科学研究所	〒194-8511	町田市南大谷11号 TEL 0427-24-6226
明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所	〒250-0862	小田原市成田540 TEL 0465-37-3661
(有)共進理工“細胞分別”ナイロンメッシュ	〒113-0033	文京区本郷5-13-1ドエル本郷205 TEL 03-3813-1073

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 竹市 雅俊

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,300名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願ひ申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局(八杉貞雄)

〒192-0397 八王子市南大沢1-1

東京都立大学大学院理学研究科生物学教室

TEL 0426-77-2572(直通) FAX 0426-77-2559

-----切-----り-----取-----り-----線-----

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所	
会 社 名	®
担当者名	
電話番号	

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約1,300人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,200部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

	広	告	料
DGD本誌	1	頁	年6回
	半	頁	//
インフォメーション	1	頁	年3回
サーキュラー	半	頁	//
			150,000円
			78,000円
			90,000円
			45,000円

尚、サーキュラー用の版下作製代は実費をいただきます。裏表紙は1頁10,000円高となります。

申し込み先：日本発生生物学会事務局（八杉貞雄）

〒192-0397 八王子市南大沢1-1

東京都立大学大学院理学研究科生物学教室

TEL 0426-77-2572(直通) FAX 0426-77-2559

e-mail: jsdb@bcasj.or.jp

-----切 り 取 り 線-----

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

<input type="checkbox"/>	DGD本誌	1	頁
<input type="checkbox"/>	//	半	頁
<input type="checkbox"/>	サーキュラー	1	頁
<input type="checkbox"/>	//	半	頁
住 所 会 社 名 ㊞ 担当者名 電話番号			

アフリカ ツメガエル

澄んだ空気、汚染のない川、
沼の水等、恵まれた自然環境
の下で育った良質のアフリカ
ツメガエル。

使用目的：遺伝子組換、動物
クローン研究、細胞操作、イ
ンターフェロン培養、教材と
して生理・解剖実験に御使用
下さい。

(当養殖場では、水道水を一
切使用しておりません。)



お問い合わせは

養殖販売 **北日本生物教材**
代表 三上正義

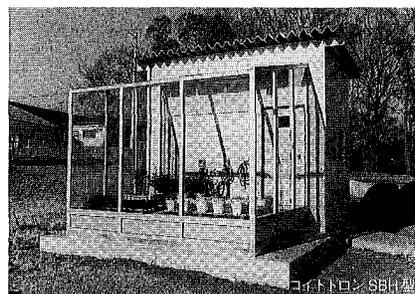
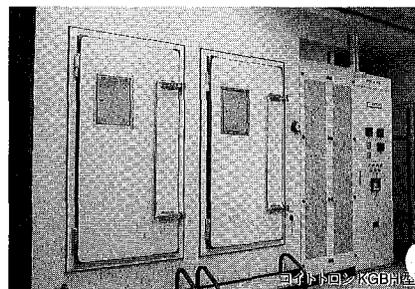
フリーダイヤル セノパスはクローン
0120-084896
(午前発注：即日発送)(月～金曜日：午前9時～午後5時)

〒036-15
青森県中郡相馬村大字坂市沢113
TEL 0172 (84) 3509
FAX 0172 (84) 3510

Kōito
安全と快適を求めて

バイオ関連の試験・研究を バックアップ

小糸工業のバイオハザード対応グロースカビネットは、
周囲環境の影響を受けずに、圧力コントロールシステムで
実験室内を陰圧に保持します。また、コンパクトで高性能
なフィルタユニットとの組み合わせで、実験対象物への
空気流による外界からの悪影響を遮断、簡単操作をプラス
して、高精度な温・湿度を再現します。

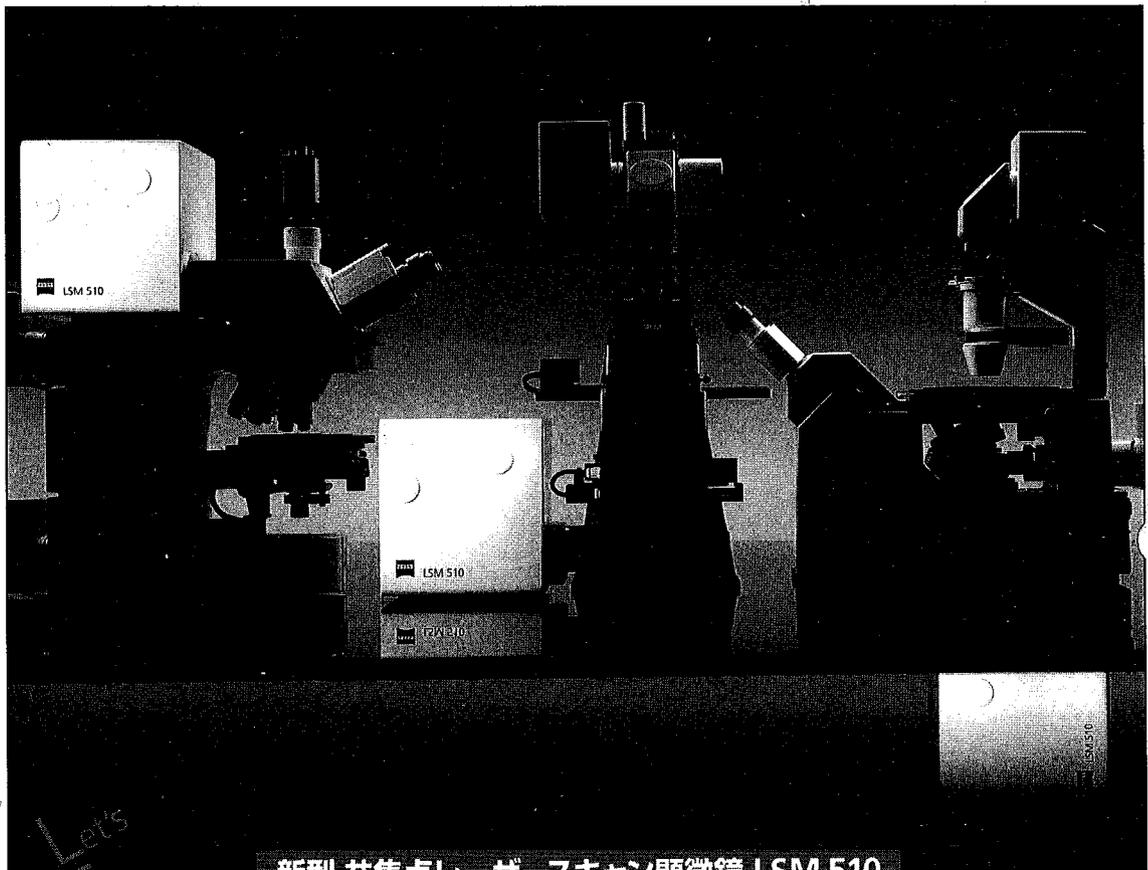


バイオハザード対応グロースカビネット **SBH/KGBH** シリーズ
コイトロン

小糸工業株式会社 東京本部 〒108 東京都港区高輪3丁目5番23号(日生高輪台ビル) ☎03(3443)9846 FAX.03(3443)6570
札幌011(722)5211 東北022(225)7501 大阪06(263)6371 九州092(431)0838 筑波0298(51)2311 沖縄098(861)1805

◻◻◻◻◻ **Memo** ◻◻◻◻◻◻◻◻◻◻◻◻

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.



Let's
See
More

新型 共焦点レーザー स्क্যান顕微鏡 LSM 510

コンパクトそして多機能

一点の妥協もなく

あなたが評価するのは柔軟な対応力ですか？それとも最高のテクノロジーでしょうか？

LSM510は、その全てを備えています。

革新的な最高の技術、極めて扱いやすいソフトウェアがもたらす抜群の操作性、コンパクトで交換容易なスキニングモジュールなど。徹底した妥協を許さない物作りの精神が、ここにあります。

斬新なスキニング手法

極めてユニークなスキニング法を採用、スキニングエリアの設定も自由自在。従って、思いのままの不定形のスキニングが可能です。全ての3D表示、各種測定法と相まって、試料情報を余すところなく表現します。

かつて、顕微鏡に抱かれていた様々な期待が、今ここに実現します。

新しい品質基準の画像

蛍光の4ch、同時取得、各ピンホールはコンピュータコントロールされ、2,048×2,048ピクセルの高精細スキニング、4×12bitの高分解能をはじめとして、積算、オーバーサンプリング、フォトンカウンティングなど、LSM510の諸機能は、全て研究者への奉仕にあります。



ドイツ ツァイスグループ
カールツァイス株式会社 顕微鏡部

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22番地
☎03-3355-0332 Fax.03-3358-7554

大阪 ☎06-282-4322 名古屋 ☎052-777-1411
福岡 ☎092-713-7821 仙台 ☎022-224-5621